

「既視感って言うのかな。そういうものを感じます」

それが彼女の、私に対する第一声だった。

新任教師として配属された高校で、私は彼女と出会った。

彼女は私が副担任として付いたクラスの生徒で、下世話な話、最も綺麗な子だと思った生徒だった。

何度目かの授業後、彼女が私のもとにやって来た。何か、質問でもあるのかと訊くと、彼女は首を振って、「既視感」なんて話を始めた。

私は面食らってしまった。何度かの授業で感じていた彼女の優等生然とした印象からはおよそ想像もつかない話だった。

「既視感？ 有名人に似てるなんて事は言われたことがないけどなあ」

「うーん、そういうのはちよつと違うんですね。なんかもっと身近な感じ。従兄弟のお兄さんとか」

「親しみやすいってこと？」

「あーそうですね。人好きのする感じが良いと思います」
その日から、彼女は私に対して妙になれなれしい態度を取ってくるようになった。正直、新任として生徒に懐かれるのは悪い気などしないが、私は彼女をなんとかして退けた。

あまり女子生徒とべたべたするものじゃない、と担任教師に言われていたのが頭の片隅にあったのだ。しかも、彼女の

家庭事情から不用意なことはするなと釘も刺されていた。

だから、彼女とは距離を取る、と言うほどではないが、深入りはしないように気をつけた。

しかし、彼女は私の都合などお構いなしだった。私を見かければ近寄ってくるし、話しかけてくる。友達を引き連れて、私を取り囲む。もう、友達感覚なのかと思うほど、彼女は距離を詰めてきた。

びしつと言ってやろう。そう思っても、どうしてか、彼女には言えなくて、なあなあになっちゃってしまっていた。

そんな日々が続いたからだろうか、感覚が麻痺してしまい、彼女との距離感はそのものだど錯覚してしまったのだ。最初は冷たい視線を浴びせてきていた担任も、すっかりそれを日常のように捉えていた。

「先生」

今日も、背後から私を呼ぶ声がした。

しょうがない奴だな。そんな呆れと、少しばかりの喜びを孕んだ心持ちで振り向いた。

そして、ふと、疑問に思った。どうして私は彼女をあそこまで甘やかしてしまうのだろうか、と。

授業中、昼休み、放課後、ずっと考え続けて、一つ思い当たった。

そう、彼女が私に既視感を抱いていたのと同じで、私も彼

女に対する既視感、いや、憧憬に近い感情を抱えていたのだ。

だから、つい彼女に「彼女」の話をしてしまったのだ――

◇ ◇ ◇

その日は殊更暑い日であった。

七月。すでに夏の季節ではあったが、ここ数日とは比べられないほど暑い日だった。空を覆い隠すような雲はなく、太陽が一人我が物顔で地上を見下ろしている。

荻野圭輔とその友人二人は公園にいたが、酷な日差しに照りつけられた公園には彼ら以外に誰もいない。

「暑い」

ベンチに腰掛けていた薫が忌々しげに呟いた。少しでも涼を取ろうと被っていた麦わら帽子で扇いでみるが、すぐにその手を止めた。手を動かした分、余計に熱くなったように、細い首筋に流れた汗を手の甲で拭って帽子を被り直した。

彼女の隣で座っている圭輔も、この暑さに参っていた。半袖のシャツは汗でべっとり濡れている。素肌に張り付く感触は実に不愉快で、圭輔は顔を歪ませている。

そんな二人とは対照的に、まだ余裕を感じさせていたのが俊哉であった。

「やっばり、今日は家でゲームしてるのが正解だったかな」
一人団扇を持って扇いでいる彼を、薫は睨み付けた。

「元はと言えば、あんたが野球の練習がしたいって言ったからでしょ！」

薫が苛立たしげに言う。ただでさえ暑さで苛立っているのに、俊哉の不要な一言で機嫌を損ねていた。

「だってこんな暑いなんて思ってたなかったんだよ」

薫の剣幕に押されて俊哉はたじろいだ。俊哉は助けを求めるような視線を圭輔に向けるが、圭輔は彼から視線を逸らした。「とにかく、涼しいところに行こう。このままじゃ、私か圭輔が倒れちゃう」

薫の提案に、圭輔は頷いて応え、ろくすっぽ使われなかったグローブとボールをリュックに詰め込み始めた。一方で俊哉はまだ余裕があった分公園に未練があるのか、片付けの手は遅い。

「はやくする！」

薫の怒声が飛んだ。慌てて片付けの手を早める俊哉を尻目に圭輔はここまで来るのに使った自転車にまたがった。

俊哉の片付けが終わると、三人縦になって自転車をこぎ出した。少しだけスピードが出ると心地よい風を感じられる。

「で、どうする？ このまま解散する？」

「あ、俺は圭輔の家に行きたい。今日、来るんでしょ？」

「来るって？」

「大衆演劇の人。ポスター貼ってあっただろ？」

圭輔は少しばかり思案して思い至る。実家である荻野屋旅館に、今日から一ヶ月ほど、大衆演劇の一座が公演にやってくる。

圭輔はそんな話を母親からされていた。

「来てたとしても、別に演劇を見れる訳じゃないのに？」

「いいじゃん。どんな人がいるか見るだけでも。な？」

縦になつて走っていたはずなのに、いつの間にか俊哉は圭輔と並んでいた。両手をハンドルから離し、お願いと手を合わせて圭輔に頼み込むものだから、二人の後ろに付いていた薫が甲高い声で俊哉を叱りつけた。

「薫だつて気になるだろ？」

「そうだけど……おばさんたち忙しいんじゃないの？」

薫が圭輔に訊く。圭輔はしばし考えた後に、頷いた。

「今日は多分、準備とかあるはず」

圭輔がそう言うと、俊哉は露骨に唇をとがらせて、

「なあんだ。がっかり」

とつまらなさそうに言った。

「じゃあ、今日はもう帰ろうか」

薫がそう言うと、俊哉は何か思いついたのか、にやりと笑つて圭輔の顔を見た。俊哉はそのままペダルを強く踏み込んで、スピードをつけて圭輔の前に出た。

「圭輔、旅館まで競争しようぜ」

圭輔は一瞬、呆気あつけに取られたような顔をしたが、俊哉の言葉を理解すると、にやりと笑い返して、ペダルを強く踏み込んだ。後ろから、薫の大げさなため息が聞こえてくるのを余所に、二人はぐんぐんとスピードを上げる。

「騙だまされてるじゃん。圭輔」

二人を追いかける薫が小さく呟いた。

「圭輔！ 遅いぞ」

俊哉は振り向いて、やつと追いついた圭輔に勝ち誇った顔で言った。

「スタートが卑怯ひきょうだったから、お前の勝ちじゃない」

息を切らしながらも、圭輔は大声で張り合う。俊哉は「勝負を受けたんだから、お前の負けだ」と言い返す。それを圭輔がまた言い返して、半ば喧嘩けんかをしているような様相になつたところで、薫が漸く追いついた。

「楽しそうね？」

多分に嫌みを含んで、圭輔と俊哉の両肩を叩く。二人揃そろつて振り向き薫を見ると、圭輔も俊哉も今かいている汗とは違つた粘っこい汗が背筋に流れた。

「俊哉の家つてき、旅館とは反対側だよ。当たり前のように旅館をゴールにしてたけど」

あ、と小さな眩きを漏らしたのは圭輔だった。薫と圭輔は家が近くにあるが、俊哉の家は先ほどまで一緒にいた公園から見ると旅館の反対側にあった。

「馬鹿じゃないの、圭輔も俊哉も」

呆れたように二人を見つめる薫。面目なさそうにする圭輔と、どこ吹く風で口笛をわざとらしく吹く俊哉。

「まあ、ここまで来たなら寄っていく？」

「流石、圭輔！」

手をはんと叩いてみせると、俊哉は自転車から降りて、旅館の裏口、圭輔の家のある方に向かっていった。

その後が続く圭輔に、薫は何か言いたそうな視線を送っていたが諦めたのか二人に続いた。

「うわ、酷い汗」

玄関から三人が入ると、外に出かけようとしていた圭輔の兄——浩輔と偶然はち合わせた。三人があまりにも汗をかいていたものだから、浩輔は思わず眉を擡めた。

「母さんに言っつて、風呂に入っつてこいよ」

「今つて大丈夫なのかな」

「チェックアウト終わつてるし大丈夫だろ。風呂だけの客はいるかもしれないけど、そのままつていうのはちよつとな」

「分かった。訊いてみるよ」

そう言つて、圭輔が旅館に繋がる廊下に行こうとすると、浩

輔に止められる。

「いいや。俺が訊いてくる。客がいるかもしれないのにその格好じゃ行かせられんわ」

圭輔の肩を掴んだ時に、じつとりとした感触がして、浩輔は顔を歪ませる。

しばらく待つと、浩輔が戻つてきて、片手でマルを作つた。「もうすぐ、大衆演劇の人たち来るらしいから、早く入れつて

さ」

浩輔の言葉に俊哉は目を輝かせた。まんまと自分の思う通りになつて喜んでいるようだった。圭輔はちらりと薫を見たが、薫もなんだかんだで気になつていたようで、視線は旅館に続く廊下に向かつていた。

三人は足早に浴場に向かった。俊哉は圭輔をけしかけて急かしたが、薫も「早くしろつて言つてたし」とそれをとがめなかつた。三人は浴場のある二階への階段を急ぎ足で上つた。

脱衣所に人影がないことを確認すると、そこからはもう、すっかりかけっこだった。一番近くのロッカーに、無造作に服を脱ぎ入れると、競るようにして浴場に入った。流石に客がいるし、滑りやすい浴場の中まで走るようなことはなかつたが、常連の客が怪訝そうな表情で二人を見つめる程度には急ぐ気持ちで身体に出ているようだった。

鳥の行水、と言わんばかりに二人が浴場にいた時間は五分

とかからなかった。乱雑に身体を拭くと、代えの服である浴衣を羽織って、またしてもかけっこが始まった。

流石に女の子である薫は二人よりも早くはなかったが、それでも、時折お風呂に入りに来た時よりもずっと早く出てきた。

さほど待っていないはずなのに俊哉が「遅い」と不満を垂れると、薫は小走りで寄ってきて、二人と合流した。

「いつ来るかな？ もう来てるかな？」

俊哉は逸る気持ちを抑えきれないのか、そんなことをずっと繰り返していた。

三人が階段を下りると、ふと、旅館の玄関の方が賑やかなのが見ついた。

「あれ、チェックインはまだ先なのに、珍しいな」

圭輔が何の気なしに呟いた言葉に、俊哉と薫は何か感付いたようで、圭輔は急に駆けだした二人に手を引かれた。

「圭輔、これは来てるな」

廊下に貼られた大衆演劇のポスターを指差しながら、俊哉が言う。

玄関近くに向かうと、大勢の人がなにやら荷物を運び入れていた。玄関の近くに張られたガラスの向こう側には見慣れぬ大型車が何台か並んでいる。その車の周りにも、何人かが荷物を下ろしている。

一見すると引越し業者が来ているかのようにも見えたが、

荷物を運び入れる人たちは老若男女、様々な人がいて、どちらかというとき大きな民族集落が移動しているかのようだった。

三人は邪魔にならないようにと、隅に寄った。しかし、その視線は彼らから一切離れることはなかった。

彼らが特別なことをしている訳ではない。ただ、荷物を運び入れているだけ。しかしながら、圭輔たちの視線が釘付けになるのは、ここが穏やかな田舎町だからだろう。山と海とに囲まれた田舎町、流れるは牧歌的な香りだけ。そんな町で、いつもと違う風は魅力的なものであった。ましてや、小学生である圭輔たちにはなおさらだった。

三人とも、大衆演劇とはなんぞやということさえ知りしなかったが、なんとなくの非日常感に浮かされた。

「あの荷物って、何に使うんだろうな」

俊哉は運び入れられる荷物の一つ一つに興味津々で、じっと目で追いかけていた。薫は薫で、次々と奥に運び入れる人たちの顔を黙って見ていた。

しかし、圭輔だけは荷物を運び入れるばかりの光景に飽きていた。僅かに嗅ぎ取った非日常の芳しい匂いは、旅館の正面から見える海の風と共に霧散してしまっていた。

旅館の息子である圭輔にとっては荷物を運び入れるだけではそこまでの関心が持てなかったのだ。ポスターで見たような格好をしているわけでもないし、大人数とは言っても団体旅行で

来る客とそこまで大差はなかった。

先に部屋に戻るよ、そう言つて身体をひるがえしたところで、不意に薫があ、と声を漏らした。圭輔は足を止めて、薫が視線を向ける方を見た。

最初に目に飛び込んできたのは、幾人かの圭輔たちよりも幼い子どもたち。そして、視線を少しだけ上げると、子どもたちの手を引いて旅館に入ってくる少女の姿が目に入った。背格好から見るに浩輔と同年代くらいの彼女は、まるで幼稚園の先生のように、大人たちの邪魔にならないように巧みに子どもたちを誘導していた。

「綺麗……女優さんみたい」

息を飲む薫。その視線は圭輔と同じく少女に向けられていた。

少女はどこか日本人離れた雰囲気まを漂わせていた。肌の色が違ふとか、髪の色が違ふとか、そういったことはなく、何か具体的なお客さんを持つて言うことはできなかったが、かつて「海外生活が長くて」なんて言っていたお客さんよりも、よほど異国の気配を纏まとっていた。

あまりにも圭輔と薫が熱心に見つめているものだから、少女もその視線に気がついたのだろう。彼女は圭輔たちの方を見やうった。

心臓がどきりと音を立てた。見ていたことが少女にばれたと

思い、圭輔はとつさに視線を外す。高鳴る鼓動を落ち着けよう、と、しばらく深呼吸を繰り返しながら、床を見つめた。

あなたを見ていた訳ではない。

それが圭輔にできる精一杯の誤魔化しだった。かえって不自然に見られてしまうことに圭輔は気がつかなかった。

「どうしたの？」

不審がった薫が、怪訝けげんな表情で圭輔の顔をのぞき込んだ。

「別に、なんでもないよ」

ぶつきらばうに圭輔は言い放つ。ふうん、と薫は返すと、また少女の方に視線を戻した。圭輔も恐る恐る視線を戻すと、少女はまだ圭輔たちの方を見ていた。俊哉も気がつけば彼女の方に視線を向けていたせい、少女は薄く微笑ほほえんで、圭輔たちに向かつて小さく手を振った。圭輔は小つ恥はずかしさからどうしようかと逡巡しゆんじゆんしたが、二人が返してしまつたので、自分一人が返さないのもバツが悪いと、少女よりも小さく振り返した。

見知らぬ人を見ていたら、子どもだからと優しく手を振られた。たつた、それだけのことなのに、圭輔はたまらなく恥はずかしくて、二人の手を引いて「もういいじゃん」と強引に部屋に駆けていった。

うだるような暑さの外気よりも、駆け巡る血液が沸騰しそうなほど身体が熱くなるような、そんな出会いだった――

玄関先にいた集団は、やはり大衆演劇の一座のようだった。通りかかった圭輔の母親に聞いてみると、そうだと教えてくれた。

旅の一座は、すっかり荷物を運びきってしまったようで、普段はあまり客が入らない奥まった部屋おおじよたいに大所帯で入っていた。その後は特に出てくる様子もなかったたので、薫は服が乾くと、暗くならない内に帰っていった。俊哉は渋しぶったものの、流石に暗くなりかけた頃には帰っていた。俊哉は別れ際、「絶対観に来るからな」と言い残していった。

一座は今日からこの旅館を拠点にして、盆過ぎ辺りまで旅館や公民館などでいくつかの公演を行っていくらしい。

圭輔は知らなかったが、昔はよく来ていたそうで、俊哉を見送った後、部屋に戻る際に板場のおじさんや古株の仲居さんたちが懐かしそうに一座の話をしているのを聞いた。

どうやら懐かしそうにしているのは旅館の人だけでなく、大浴場を利用しに来ていた町の人も同じようだった。

旅館は圭輔が知る限り一番と言ってよいほど、楽しげな雰囲気きに包まれていた。普段なら、ゆったりとした空気が流れている荻野屋旅館であったが、今日に関しては、落ち着かない。かき入れ時でも滅多に感じない雰囲気きに、圭輔も心がそわそわとして落ち着かなかった。

俊哉ほど大衆演劇に興味はなかったが、今では、早く早く

心の中で思っていた。

一夜明け、旅館の賑やかさは頂点に達しようとしていた。日曜日ということもあってか、昼一番に行われる公演を見ようと、隣の町からも人が来ているようだった。圭輔の部屋の窓から見える駐車場は、本来ならばバスでの送迎があるため滅多に埋まることのないが、今日は見事に埋まっていた。

誰も彼もが旅の一座を心待ちにしている、そんな雰囲気きが自室にいても伝わってきて、圭輔はついぞ堪こらえきれなくなった。奥で忙せわしなげの父親を捕まえて、圭輔は少しでいいから今日の公演を見せて欲しいと頼み込んだ。

父親はしばらく考え込んで、「お前が観ても楽しいものじゃないと思うがなあ」と返した。一昨日おとといまでの圭輔は広間に貼られたポスターを見て、食指しよくしが動くものではないと感じていた。しかし、今の圭輔はすっかり雰囲気きに飲み込まれてしまっていて、好奇心がほとばしっていた。あまりにも気になって仕方がないので、何度も何度も拝み倒すように父親に懇願すると、漸く折れてくれたのか、仕方ないと許可を出してくれた。

観ることを許可してくれた、と言っても席を確保できる訳ではなく、立ち見であったが、それさえもどこか特別のような気がして胸の高鳴りが抑えきれなかった。

本当のところを言うと、父親は圭輔がすぐに飽きてしまうことを見越して、立ち見にさせたのだらう。飽きて出て行くにも、

他の客に迷惑がかからないように、出口側に場所を取らせた。そんな父親の思惑などつゆ知らず、圭輔は公演が始まるのを今か今かと待っていた。

待つこと数分、一座からのアナウンスが入り、やつと公演が始まった。演目は『人生劇場』、この町にゆかりのある任侠もののだと圭輔は聞いていた。しかしながら、圭輔は「任侠もの」という言葉自体を理解していなかったのか、なにやら壮大なアドベンチャーが巻き起こるのだろうかと思想していた。

開演から少しして、圭輔は案の定、飽きていた。初めて観る大衆演劇は、およそ圭輔の想像の及びようもないもので、その内容を理解し、面白みというものを感じるには、あまりにも幼すぎた。

しかし、途中で抜け出すのはなんだか負けたような気がするし、なにより件の少女が出るかもしれないと、圭輔は最後までじつと粘った。圭輔が向ける旅の一座に対する興味関心の半分以上を少女が占めていた。

公演が終わると、圭輔はがくりと肩を落としながら、そそくさとホールから出た。最後まで公演を観たものの、内容は一割も理解できなかったし、なにより件の少女は一切出てこなかった。高まり膨らんでいた期待が一気に萎んでいくのが、圭輔自身も分かった。部屋に戻る頃には旅の一座の本業に対する興味関心はすっかり消失しきって、意識は少女と子どもたちだけに

向けられた。

旅の一座は、何組か家族まるごと行動を共にしているらしかった。既婚者の多く、いや、ほとんどが妻を引き連れ各地を行脚している。子どもが生まれれば、祖父母に預けるか連れて行くか、その選択の中から連れて行くことを選択された子どもたちが、昨日圭輔が見た子どもたちであったのだ。

親たちの羨の賜物か、それとも先生のような役割を担っていた少女——といっても、圭輔よりも五つ年上の浩輔と同じくらいの年齢好であるが——のおかげか、子どもたちは圭輔よりも幼いというのに行儀が良く、部屋の中で大人しくしていることが多かった。向こうがなかなか出てこないのに、圭輔もわざわざ行く気になれず、気にはなりつつも何もしないという状況が続いていた。

最も、件の少女に対する恥ずかしさが、圭輔を消極的にさせていた。手を振られる、そして振り返すという取り立てて気にすることもない些末な出来事ではあったが、異性というだけで強い反発を生んでしまう年頃である圭輔には、その割り切りというものが簡単に済むものではなかったのである。

休み明け、圭輔は集団登校で同じ班の薫から、少女のことを訊かれた。一瞬、戸惑った素振りを見せた圭輔に、薫は不思議そうな顔をしたものの、好奇心が先行したのか、「少女は公演に

は出たのか」など、矢継ぎ早に質問攻めをした。

学校に着いてからは、俊哉が薫と入れ替わる形で質問攻めをしてきた。その様子を見ていたクラスメイトが、どこかで聞いたのか同じように旅の一座についてあれこれと訊ねてきた。

娯楽に飢えた片田舎に、見慣れぬ一団が来たのである。興味が薄かった圭輔さえも一時は熱に浮かされたような気分になったのに、同じ年のクラスメイトたちがそうならない訳はなかった。

思いつくがままに、圭輔の都合など気にせずぶつけてきて、満足な回答がないとクラスメイトたちは不満を言った。圭輔にしてみればたまったものではなかったが、クラスメイトからしたら質な雰囲気になってしまっていた。

休み時間になれば、クラスメイトにとどまらず、隣のクラスからも何人か野次馬が集まってきて、質問を浴びせられた。次々と人が変わるせいか、訊かれることは大体一緒に、流石に圭輔も苛立っていた。今にも掴み掛かりそうな圭輔の雰囲気を感じ取ったのか、学級委員を務める薫が追い払ってくれはしたが、圭輔は内心、「お前も朝訊いてきたくせに」と思わずにはいられなかった。

この圭輔にとつてはた迷惑な流れは放課後も続いた。誰かが圭輔の家に行きたいと言えば、それがクラス中に広がり、多く

のクラスメイトが下校時に着いてくるという珍事に繋がった。もちろん、集団下校であるため、全員が全員という訳ではないが、帰り道が圭輔と重なるクラスメイトたちは、こぞつて圭輔の後を追いかけるようにして付いてきた。

勘弁してくれと頼んでみても、止めると怒鳴ってみても、クラスメイトたちは付いてきた。圭輔が怒れば怒るほど、面白がる者もいた。彼らは、すでに旅の一座に対する興味よりも、圭輔を困らせることに終始していた。結局、ハーメルンの笛吹きのごとく、圭輔を先頭に、ぞろぞろと旅館にクラスメイトたちがやってきたのである。

しかしながら、勝手に旅館にやって来て、旅の一座に会わせろと言ってもそう簡単にはいかない。一座が夜の公演に向けて準備をしている最中に、旅館の次男坊の級友といえど、割ける時間はない。しばらくすると、先ほどまでの異様な熱気は潮が引いていくように消え、ばらばらとクラスメイトたちは帰っていった。

一時間経ったか経たないかの頃、漸く最後の一人が帰っていった。公演時間まで粘ろうとしていたようだが、流石にあと二時間弱も待ってられないと、渋々ながら旅館を後にした。

しち面倒なこともこれまでかと、ほつと胸を撫で下ろしていると、件の少女が帰ってきた。旅館の入り口から、邪魔にならぬようにと静かに、しかしながら、旅館の者を見かけると明る

く朗らかに挨拶をして。

彼女は今日から圭輔の兄と同じ中学校に通っていた。しかし、彼女が身に纏っていたのは時折見かける野暮ったい中学校のセーラー服ではなく、どこか都会的で見慣れないブレザーであった。

圭輔はやはりまだ彼女に対して苦手意識ともいべきか、恥ずかしさが残っていた。意識はしているものの、いざ實際顔を合わすとすると、顔から火が出そうであった。向こうがこちらに気がついてはたまらないと、そそくさと部屋に逃げ戻った。

圭輔は一座が来てからずっと、彼女の前に姿を見せたくないと思いつまわっていた。最も、少女は学校以外の時は幼い子たちの面倒を見ているらしく、滅多に会うことはなかった。

おそらく、今日も公演が控えているため、子どもたちの面倒を見ることになるのだろう。圭輔は彼女の窮屈さを考えて、なんだか悲しい気持ちになった。

クラスの騒ぎは三日も経てばすっかり止んでしまっていた。どこからか漏れ聞こえた件の少女のことも含めて、あれこれ訊かれたが、それも落ち着いてきた。

旅館に一座がいることもすっかり当たり前になっていた。公演のない日に一座の人がいれば挨拶もするし、ちよつとした会話をすることもあった。まるで長期の宿泊をしているお客さんのようで、あの時感じていたざわめきというのも、もうすっかり

りなくなってしまうていた。

ぼんやりと日々を過ごしていけば、一座はやがて帰っていく。結局、子どもたちとも、ろくすっぽ話すこともなく、別れが来るのだろう。

ふと、先日兄が件の少女が同じクラスに転入してきたと言っていたことを思い出した。短い期間といえど、クラスメイトとして過ごす期間があったのだとしたら、多少の感慨はあるのだろうか。もし、圭輔と同じ年の子がいれば、そうなるのかな、と退屈な授業中、そんなことを思った。

「ケイちゃんはもう慣れっこだね。退屈じゃないかい？」

夜、圭輔は秋祭りに向けた太鼓の練習をしに、公民館に来ていた。金曜日と土曜日の夜、地域のお年寄りが小学生たちに太鼓を教えているのだが、三年目になる圭輔にとっては慣れたもので、説明を聞かなくても一通りできてしまっていた。

同じ地区に住む薫や俊哉たち友人も来るので、休憩時間に遊ぶことだけが楽しみで、練習自体は早く終われとつまらなさそうに、太鼓——最も、全員分はないので空き箱を太鼓に見立てたものであるが——を叩いていた。

「太鼓の練習よりも、野球の練習の方が良いよな」

休憩時間、圭輔の横にやって来た俊哉が不満を垂れる。圭輔も同調して、「夏休みに入ったらすぐに大会があるのにさ。祭り

なんて二ヶ月も先なのに」と言った。

「太鼓も野球みたいに打てたら楽しいだろうになあ」

俊哉はバチをバットののように握り、ぶんぶんと振っていた。

「そのフォームってさ、この前止めろって言われてたの？」

「そうそう、監督にも言われたよ、怪我するから練習でもするなって」

唇をとがらせながら、俊哉は何度もそのフォームで振った。

圭輔たちが住む町では、夏になると子供会対抗の野球とソフトボールの大会があった。前者は男子、後者は女子で、圭輔たちもその大会のために練習をしていた。

子供会程度の大会であるからか、面倒を見てくれる保護者は怪我だけに敏感で、俊哉がしたような、子どもがすると危ないフォームは、こっぴどく禁止していた。

「こら、振り回したら危ないじゃない」

遠くから薫が駆け寄ってくる。薫は圭輔たちとは違い、バチではなく、横笛を持っていた。

「横笛の方が振りやすそうだね」

そう言っつて、俊哉はヘラヘラと笑う。ふざけた態度を取る俊哉に、薫はかつかして俊哉の肩を掴んで揺さぶった。

「そういえば、薫は横笛なんだ」

俊哉を揺さぶる手を止めて、薫は圭輔の方を向いた。

「まあね、本当は四年生からなんだけど、人数が少ないからっ

て」

「ふうん。じゃあ、来年辺りは俺たちも大太鼓に回されるのかな」

「それは、よく分かんないけど」

「あ、大太鼓ならやりたい！」

いつの間にか薫から解放されていた俊哉が言う。わざとらしくバチで太鼓を叩く真似をして見せた。圭輔と薫は呆れたように俊哉を見つめた。

「あ、でも、横笛は吹いてみたいかな」

圭輔は薫の持つ横笛に視線を移した。上級生が今まで担当していた横笛は圭輔が一年生の頃から気になっていたものだった。初めて横笛に触れる上級生たちが音が出ずに苦労している姿を見てから、その難しさが気になっていたのだ。

「えー、気持ちわりいよ」

「どうして？」

「だつてさ、新品じゃなくて使い回らしいよ、それ」

「え、そうなの？」

圭輔は薫を見やると、薫は小さく頷いた。そして、弱々しく、「一応消毒してるから、毎回」と言った。

薫の横笛を見る目つきがなんだか陰しくなった気がした。

「気にするなよ。そんなこと言ったら給食の箸とかスプーンも気持ち悪くてつかえませーんってことになるだろ？ 俊哉は給

「食食べなくて良いの？」

圭輔の言葉に、俊哉は思わずたじろいだ。そもそも、他人が口につけたものを再利用している機会なんて山ほどあるのだから、洗っているならいいだろ、と圭輔は言った。

思わぬ助け船に、薫は気をよくしたのか、大仰に頷いて、圭輔に同調した。

「なんだよ圭輔、薫の味方してさ」

「味方とかそんなんじゃないやなくて、そう思ったの」

俊哉は気に入らないのか、へそを曲げてそっぽを向いた。一方で薫は勝ち誇った顔をしている。

しばらく圭輔にとっては気まずいぴりぴりとした雰囲気が残ったが、練習が再開される頃にはまたいつもの三人に戻って、くだらない雑談をしながら、練習場所に帰っていった。

午後九時より少し前、太鼓の練習が終わった。夏といえどすっかり空は真つ暗だったが、圭輔は一人で家路に就いていった。

田舎町特有の妙な警戒心の薄さのせいか、子供会の手伝いをしている保護者たちは下級生や女子だけに注意を払って、中上級生の男子は適当にご褒美の缶ジュースを握らせて帰らせていた。圭輔にも昨年までは誰かしらが着いてきてくれたが、今年からは家まで一人。途中まで一緒にいた薫には、薫の両親が迎

えに来ていたが、圭輔の両親は忙しい身であるから迎えに来るなんていうことはなかった。

公民館から旅館へ続く道は住宅街でないということもあってか、途中から街灯がめつきりと減っている。それに、道の横に並ぶ木々が、その枝葉を大きく広げているものだから、薄暗さに拍車をかけている。

大人ですら不気味に感じる道であるため、圭輔も恐怖、不安といった感情をにじませていた。気を紛らわせるために、お気に入りの野球選手の応援歌を口ずさみ、足早に明るい旅館付近まで歩いている。しかし、時折聞こえる虫の音が気味の悪く、不安感を煽ってくる。

漸く、旅館近くの坂に着いた。この辺りは宿泊客のために、か、街灯が僅かばかりであるが整備されており、大仰に「荻野屋旅館」の看板もある。ここまで来ればもう家に帰ったも同然で、今度は流行のポップスを口ずさみながら、軽やかに坂を下っていった。

坂を下りた後の平坦な道を駆け、さあ家に入ろう、というところで、不意に声をかけられた。

「圭輔くん」

どきりとして、足が止まる。不意にかけられた声は、聞き覚えのないものだった。旅館の人で「圭輔くん」なんて呼ぶのは仲居のおばちゃんぐらいなものだが、おばちゃんにしては声が

高く、若すぎた。

恐る恐る声の方に顔を向けると、そこには件の少女が立っていた。少女はにこやかな表情で圭輔を見ている。

「圭輔くん、だよね？」

深く澄んだ声。一座の娘だからだろうか、はっきりとした声色で、少女は圭輔に訊ねかけていた。心臓がその鼓動を早め、身体がすくんだ。不安な夜道の一人歩きの後ということもあつてか、圭輔の頭は真つ白になってしまっていた。

「圭輔くん？ あ、ごめんね。驚かしちゃったかな？」

申し訳なきように、少女が謝ると、驚き固まっていた圭輔の口が少しは動くようになっていた。しかしながら、口が回るようになつたところで、出てくるのは言葉になり得ていないような、しどろもどろとしたものばかりで、口を動かせば動かすほど、圭輔の頬は熱くなつていった。

そんな圭輔の様子を見ていて、少女は小さく、くすりと笑つた。

「ごめんね、たまたま圭輔くんを見かけたから、声をかけちゃつた」

「ふうん、そうなの……あ、いや、そうなん、ですか」

友人と話すような口調を慌てて直す圭輔に、もう一度少女が小さく笑つた。

「普通に話してくれて良いよ」

「は、はい」

「もう、そんなに固くならなくて良いのに」

少女は圭輔の身長に合わせて少し腰を曲げる。彼女の表情は普段から子どもたちの相手をしているからだろうか、茶目つ気のようなものを圭輔は感じた。

「いや、でも、うーん。そう？」

「そうそう、それでいいよ」

彼女は満足げに頷いて、それから圭輔を手招きした。圭輔が少女の元にゆっくりと近づくと、圭輔にだけ聞こえるように、腰を落として、「こんな時間に何をしていたの？」と訊いた。

耳元に少女の息が僅かばかりかかり、こそばゆさと恥ずかしさに圭輔は顔をしかめる。

「秋祭りの太鼓を公民館で練習してた」

ぶつきらぼうに圭輔が言う。視線は今回もまた、少女から外されて地面に向けられていた。

「そっかあ、秋祭りねえ。私ね、てっきり圭輔くんが夜遊びに出かけてたのかと思っちゃった」

「夜遊び？ 花火でもない限り、夜に外で遊ぶものなんてないよ」

「ああ、いや、そういうのじゃないけどね」

今度は少女の方が慌てた素振りを見せる。幼い圭輔にはまだ彼女の少し下世話な冗談が分からなかった。

「そーいや、えーっと……」

圭輔は少女の名前を呼ぼうとして、まだ彼女の名前を知らないことに気がついた。戸惑い、揺れる圭輔の視線に気がついた少女は自身を指差して首を傾げた。

「リサ。梨に沙羅双樹の沙……って言っても分かんないか」

「梨沙、さん」

圭輔は噛みしめるように呟いた。

「梨沙さんは何してたの？」

「私？ 私はちよつとしたお散歩かな。ずっとお部屋にいると息が詰まっちゃうからね」

「でも、こんな時間に？ 外、真っ暗だよ？」

「こんな時間に、だからかな」

少女は肩をわざとらしくすくめて、小さく息を吐く。これも旅の一座の娘であるからなのか、一つ一つの所作が芝居がかった見えた。それがわざとであるのか、素であるのかは圭輔には判別がつかない。

「学校から帰るとね、ちびたちの面倒を見なきゃいけないから、自由な時間はこの時間ぐらいって訳なんだよね。本当は明るい内の方が景色も良いし楽しいんだろぅけどね」

「ふうん、やつぱり大変なんだね」

「やつぱり？」

「あ、いや。なんでもない」

梨沙に聞き返されて、圭輔は慌てた。狼狽える圭輔の様子に、梨沙は優しく微笑んだ。

「気になってた？」

「そんなこと……」

「本当に？」

梨沙はじつと圭輔の瞳を見据えた。まつげの長い、大きな瞳に見つめられ、圭輔はふいと顔を逸らして、「ちよつとだけ」と言うと、梨沙は声をあげて笑った。

「笑わないですよ！」

「ごめんごめん。そうだよね、普通気になるよね」

「兄ちゃんとか、父さんたちが言ってたから」

「ああ、浩輔くんね」

「同じクラスなんだっけ、兄ちゃん」と

「うん。同じクラスだった。まあ、三クラスしかないみたいだからね。少ないんだね、前に行つたところは八クラスあつたのに」

「そんなにあるの？ 小学校は一クラスしかない学級もあるのに」

「へえ。そうなんだ、でも全員と仲良くなれそうだね」

「まあ、同い年の奴らは全員顔と名前分かるし」

圭輔は俊哉や薫、それ以外にとクラスメイトの顔を次々と思ひ浮かべていた。圭輔の学年は二クラスあつたが、それでも六

十人弱しかおらず、そもそも保育園が一つしかない町で、同級生全員の顔と名前を覚えていない方が不思議だった。

「じゃあ、みんな仲良しなんだね」

「全員が全員仲良しって訳じゃないけど、多分、男ならみんな一回は一緒に遊んだことがあると思う」

「へえ、いいなあ、そういうの」

「梨沙さんはそうじゃなかったの？」

「私はね、転校ばかりだから、そういうのはなかったなあ。

圭輔くんが羨ましいかも」

「転校？ 何回したの？」

「もう、数えてないなあ。年に何回もするから、多分三十回は超えてると思う」

「三十！」

思いがけない数字に圭輔は驚き果ててしまった。圭輔は転校なんてそもそもするものだと思っていなかったのだ。今までのクラスメイトに転校生はいたけれど、今はもう転校していくクラスはなく、ずっといる。そんな環境だからか圭輔はクラスメイトが出て行くなんて思ってもみないことだった。

「じゃあ、友達一杯だね」

「うーん、どうかな」

梨沙の顔が僅かばかり曇る。

「どンドン、名前も顔も忘れていっちゃうからね」

「そう、なんだ」

「あ、なんかごめんね。圭輔くん捕まえてこんな変な話しちゃって」

「ううん、別にいいよ」

そう言って、圭輔は首を横に振った。

「そうだ、もう戻らなきゃ」

「ああ、そうだったね。もう、結構遅いんだった」

「梨沙さんも、そこそこで切り上げた方がよいよ。夏でも夜の潮風は身体を冷やしちゃうよ」

そう言って、圭輔はぐるりと身体を裏口に向けると、さっさと駆けていった。後ろの方で、梨沙の「またね」という声が聞こえて、振りかえて大きく手を振った。

家に戻り、廊下を歩いていると、寝間着姿の浩輔が彼の自室から出てきた。短く切りそろえられた髪が僅かばかり濡れているのが見える。

「圭輔、遅かったな。何かあったか」

「梨沙さんに会って話しかけられたんだ」

「へえ、梨沙さんにね」

浩輔の口から彼女の名前が出て、圭輔はふと、梨沙がごくごく自然に自身の名前を呼んでいたことを思い出した。

「兄ちゃんが、梨沙さんに俺の名前を教えたの？」

「ああ、そういえばな。クラスでお前たちのことを訊かれたん

だ。なんだ圭輔、梨沙さんに何かしたのか？」

「お前たち？」

「お前と、俊哉と薫だ」

「ううん、別に、俺は何にもしてないよ。今日初めて話したんだもん。俊哉と薫も多分同じ」

「そうか、まあいいや」

浩輔はあまり納得はしていなさそうだったが、そうそうに梨沙の話を切り上げて、野球の練習の話を始めた。

「頼まれてたグローブの手入れ、やっておいたからな」

「ありがとう、兄ちゃん」

「小学校を卒業するまで子供会の野球はずっと続くからな、そろそろ自分でやれるようになった方がいいだろうな。明日、太鼓の練習に行く前か、野球の練習の後かに一回俺の部屋に来い。教えてやるよ」

「難しくない？」

「慣れりや簡単だよ」

それから少しばかり兄と野球道具の話をして別れた。圭輔は、浩輔が向かうであろう台所の反対にある風呂場に小走りで行った。

梨沙や浩輔と雑談したため、時間はすでに午後十時近くになっていた。あんまり遅くなると母親に怒られてしまうと、脱衣場で乱雑に脱ぎ散らかすと、髪と身体を勢いよく洗い流し、

湯船に十秒も浸からずさっさと風呂から出てしまった。

脱衣所から出て自室に戻ると、浩輔も時を同じくして台所から戻ってきたところであった。両手で小皿と麦茶の入ったグラスを乗せた盆を持っていた。小皿には夜食にと自身で握ったのかおむすびが三つ載っており、圭輔もそれを見たら小腹が空いてきてしまった。

「なんだ圭輔、随分早風呂だなあ」

「夏だから仕方ないよ」

「せっかく温泉から引いてるのに。他の子の家じゃあり得ないぞ」

「そんなこと言われても、他の子のお風呂なんて知らないし」

「もったいないとは思うがなあ」

「別に大浴場じゃなきゃ、家の風呂なんてどこも一緒でしょ」

そんなことよりさ、兄ちゃん、おむすび一つちょうだい？」

「もう十時だぞ、止めておけ」

「なんだよ。兄ちゃんは食って良いのに、俺は駄目だって言うのかよ」

「俺は良いの。これから勉強するんだから。なんだ、圭輔もおなかが空くくらい勉強するのか？」

浩輔の口ぶりに、圭輔は口をとがらせた。圭輔は身体を動かすのは好きだが、勉強はからきしだった。浩輔はそれを知っているから、そんなことを言ったのだ。

嘘でも勉強をやる、と言おうかと逡巡したが、もしそんなことを言った日には、浩輔は教えてやると言って、勉強するか見張るかもしれないと思ひ、結局押し黙った。

しかし、諦めきれないと、圭輔はじいっとおにぎりを見つめ続けるものだから、結局、浩輔は呆れたように息を吐いた。

「仕方ない奴だな。一つだけだぞ、持っていけ」

浩輔はそう言って、お盆を圭輔の胸元辺りまで下ろした。

「ありがとう、兄ちゃん」

「母さんには内緒な。さっさと食って寝てしまえ。明日は野球の練習があるだろう？ 夜更かしするなよ」

今度こそ浩輔と別れて部屋に入る。もらったおにぎりを頬張って食べきると、押し入れの中の布団を引きずり出して敷いた。兄の言いつけを守るようにそそくさと布団に入ると、ふと、梨沙のことを思い出した。

流石に彼女ももう自室に戻っている頃だろう。子どもたちは寝てしまっているだろうから、今頃は何しているのだろうか。

彼女も圭輔と同じように、布団に入っているだろうか。それとも、浩輔と同じように勉強しているのだろうか。そんなことを考える。

彼女のことを考えていると、ふと先刻のことが思い出された。圭輔はなんとなく左耳を弄ると、そのまま瞼を閉じた。

「センター！ 前！」

打席でノックを打つ監督の声が校庭に響く。その言葉通りに前進すると、監督が打ち上げたフライが圭輔よりやや手前のところに落ちてきた。圭輔は目視で落地点に入ると、見事にボールをキャッチする。すぐさまホームベースに向けて投げるが、肩の力がまだ強くないせいか、ピッチャーの辺りまでしか届かなくて、それをピッチャーの上級生が拾って監督に投げ渡した。

「よし、じゃあ、今日はこれで終わり。集まれ」

号令に従い、みんな一斉に監督のもとに集まる。ライトを守っていた俊哉は小さく「やっとか」と呟いた。

今日の練習はいつもよりも早く切り上げられた。俊哉がそわそわしながら監督を見つめている様子を見て、圭輔はなぜ今日の練習が少し短かったか思いついた。

「みんな気になっていると思うけれど、スタメンを発表しようと思う」

監督の言葉に少しばかり色めき立つ。と言っても、人数の少ないチームのため、上級生は全員スタメンに入るのがわかりきっている。歓声をあげたのはそのおこぼれに預かりたい俊哉や圭輔のような三、四年生の子たちだけであった。

一番のピッチャーから順に呼ばれ、ゼッケンを手渡されていく。やはり、順当に上級生である五、六年生が呼ばれていった。

「八番、センターは……」

身体がピクリと動く。先ほどまで圭輔が守っていたセンターのスタメン発表であった。圭輔も俊哉ほどではないが、そそわと落ち着かなくなっていた。

「センターは司くん。よろしく頼むよ」

残念ながら、センターは六年生が任された。わかりきっていたことではあるが、圭輔は少しがっかりとして肩を落とした。

「あー、スタメンの最後、ライトは直樹くん」

隣にいた俊哉もがっくりと肩を落としていた。

結局、圭輔も俊哉も呼ばれることのないまま、控えの背番号が手渡されることになった。どうせ全員控えに入らなくてはいけないので、後は学年ごとと呼ばれていった。圭輔は三年生にしてはかなり若い番号である十三番を与えられた。

ゼッケンを見ながら、もしかすると代打で出番があるかなと漠然ながら考えていると、先ほどまでとは打って変わって上機嫌な俊哉に声をかけられた。

「俺さ、一番もらっちゃった」

にたにたと、俊哉は喜びが隠しきれないようであった。手元にある背番号のゼッケンをぎゅつと握りしめている。

「すごいじゃん。二番手ピッチャー」

「リリーフエースって言ってくれよ」

「あれ、でも一番って四年生の柳くんじゃなかったっけ」

「あー、柳くんね。柳くんはその、十八、だつてさ」

「もしかして、柳くん十八がいつて言つて、一番が俊哉に回ってきたとか？」

「ああ、もう。いいだろ、別に。どっちもエースナンバーなんだしさ」

俊哉はぶつきらぼうに言った。凶星をつかれ、癩に障ったようだった。圭輔が謝ると、ふて腐れたように「そんなんじゃないよ」とぶつぶつと繰り返す。

「そういう圭輔は何番なんだよ」

「俺は十三だったよ」

「なんだよ、お前も結構良い番号もらってんだな」

「まあね。もしかしたら、代打で出してもらえるかな」

「点差があれば司くんと交代で出してもらえるかもよ」

「そうだといいなあ」

「そんな時には俺もピッチャーで出してもらえるかも」

二人してにたにたと笑う。二人の頭の中には、プロのエースなりに内角に投げ込む俊哉と、弾丸ライナーを打ち込む圭輔の姿があった。

「こら、二人とも、早く帰りなさい。他の子供会がもう来てるんだぞ」

監督に怒られて、圭輔たちはそそくさと帰り支度を始める。流星に圭輔はもう落ち着いていたが、俊哉は未だに興奮冷めや

らぬ様子で、いつまでも顔から笑みが消えなかった。

「一番なんてさ、少年野球じゃ絶対つけられねーもん、めっちゃ嬉しい」

よっぽど嬉しかったのだろう。何度も何度も俊哉はゼッケンを靴にしまっっては取り出してを繰り返していた。

「そっか、少年野球だと野村がいたな」

「あいつな、いつかは追い越してやるけどさ」

「ふうん」

「あいつさ、巨人の十八番は俺がつけるって言ってるんだよ」

「へえ、プロになりたいんだ」

「俺がつけるから無理なのにな」

「え、俊哉ってプロになりたかったんだ」

「野球やってる奴はなれるなら皆プロになりたいだろ」

「そりゃそうか」

変に納得して、圭輔は手をぼんと叩いた。相変わらず俊哉はゼッケンを名残惜しそうに見ている。流石に圭輔も呆れて、無理矢理靴にしまわせて、校門まで引きずり出した。

校門を出ると、薫が一人待っていた。ソフトボールの用具を持った薫は圭輔たちの姿を見つけると、不機嫌そうに睨み付けた。

「遅い！」

「えー、約束なんかしてなかったじゃん」

「それでも遅い！ 暑かったんだからね」

薫の頬には汗の雫が張り付いていた。圭輔の視線が頬にあるのに気がついたのか、薫はすぐにタオルで拭いた。

「それで、なんで待ってたの？」

「圭輔の兄ちゃんが、グローブの手入れ教えてくれるって言ったから、私も教わろうと思って。聞いてなかった？」

「あれ、言ってたかなあ。手入れを教えてくださいって言っただけ」

圭輔は薄ぼんやりとした昨夜の会話を思い起こしたが、薫にも教えると兄が言っていた記憶はなかった。

ううんと圭輔が首を捻ると、薫は「そんなことより早く行く」と急かし、圭輔の腕を引っ張った。

二人の話を聞いていた俊哉は慌てて、

「俺も行くよ。二人だけじゃない」

と騒ぎ出して、薫が掴んでいる方とは反対の腕を引っ張った。

校門から学校に入っていく他の子供会の保護者たちが、圭輔たちを見て微笑ましそうに笑っていく。恥ずかしくなった圭輔は二人の腕を払った。

「なんだよ」

二人揃って漸く自分たちが笑われているのに気がついたのか、シユンとなった。落ち着いた二人を引き連れて、保護者たちから逃げるように圭輔は家へと走り出した。

「いいか、言う通りにやれよ」

浩輔が三人を見ながら言う。浩輔の手元には自身が使っているグローブがあった。てきぱきとした浩輔の作業に、圭輔と薫はついて行けず何度も聞き返すが、俊哉は経験があるのか一人黙々と進めていた。

薫と二人で浩輔に聞き直しながら作業を進めていると、背後にふと気配を感じた。

「こんにちは」

「ああ、梨沙さん」

いつも通りの朗らかな梨沙の声と、普段よりも幾分トーンが上がった浩輔の声。なぜだか薫がくすりと笑っていた。

梨沙は女の子の手を引いていた。見たところ、三歳くらいだろうか。女の子はおつかかなびつくりといった具合で圭輔たちを見ていた。

「何をしているの？」

「ああ、弟たちにグローブの手入れを教えるんだよ」

浩輔は握っていたブラシと一緒にグローブを見せた。梨沙と女の子は物珍しそうにそれを見る。

「うちはどうしてか女の子が多いから、こういうのはあんまり詳しくないんだよね。男の子とかはこういうの好きなのかな」

「それは、まあ。人に依るんじゃないかな？ サッカーの方が好きだって奴もいるし」

「圭輔くんはどっちが好き？」

「え？」

梨沙が不意に話を振ってきたものだから、思わず作業していた手が止まった。

「あー、えっと。野球の方が好きかな」

「そっか」

梨沙は薄く笑むと、視線を俊哉や薫に向けた。

「浩輔くんって面倒見良いんだね」

「いや、そうでもないけど……」

浩輔は照れたようにはにかんだ。普段は無愛想で滅多に笑わない兄がにこにこしている様は、なんだか気持ちが悪かった。

「えっと、梨沙さん？」

いつの間にか仕上げ終わっていた薫が梨沙に近づいて言った。薫はしやがみ込んで、梨沙の手を握ったままの女の子を見つめている。

「この子、なんて名前なんですか？」

「この子は美沙よ」

「へえ、美沙ちゃんって言うんだ。可愛い、お人形さんみたい」
女の子——美沙はくりくりとした目で薫を見つめていた。にこにこ笑う薫に、少しは警戒心が解かれたのか、梨沙の手を

離して薫に近づいていた。

「梨沙さんに似ている気がする」

圭輔がぼつりと呟くと、梨沙は大きく頷いた。

「私の妹だからね」

「えーそうなの？」

薫が驚く。圭輔も、いつの間にかこちらを見ていた俊哉も同じように驚いた顔をしていた。

「随分歳が離れてるんだな」

浩輔が二人を見比べて言う。美沙はまだ浩輔には慣れていないのか、少しだけ身体を縮こまらせた。

「美沙は日本に来てから生まれた子だからね」

梨沙は美沙の頭を優しく撫でる。くすぐったそうに美沙ははにかんだ。

またしても圭輔たち三人は驚いたような顔をしていたが、浩輔は知っていたのか平然としていた。

「お母さんが欧州の出身なんだっけ」

「そうそう。だから私も小さい頃は向こうに住んでいたの」

「え、お姉さんって外国人なの？」

俊哉が梨沙に訊ねると、梨沙は小さく笑って首を振った。

「ハーフって分かるかな？ お父さんは日本人よ」

「へえ」

圭輔は梨沙の話を聞いて、なるほどなと思った。圭輔が初め

て彼女を見た時に感じた異国の匂いというのは、実際に彼女の身体に半分ほど異国の血が混じっていたからだだった。

「そういえば梨沙さん、他の子たちは良いの？」

ふと、圭輔は疑問に思ったことを訊いた。

梨沙は普段、もつと多くの子どもたちの世話をしているはずなのに、今日は妹一人しか連れていなかった。

「今日はね、時間があるみたいで他の子はお母さんたちが見るよ」

「じゃあ、梨沙さんのお母さんも？」

「……私たちのお母さんは忙しいから、仕事してるよ。お父さんが一応座長だからね」

そう言って、梨沙は僅かばかり困ったように笑った。

「あ、そうだ。ねえ、美沙ちゃんを遊びに連れて行っちゃ駄目？」

圭輔は梨沙のその表情を読んで、そんな提案をした。さっきから美沙が気になって仕方がない様子の薫も同調した。俊哉は微妙な顔をしかけたが、それを制するように薫が俊哉の腕をつねった。

「いいの？」

「いいいいよ。俺たちが見るから、梨沙さんは好きなことしていいよ」

圭輔が笑いながら言う。梨沙は戸惑ったように、目が少し泳

いだが、すぐに笑みを取り戻して、

「私も付いていくわ。お姉ちゃんだからね」と言った。

「兄ちゃんは？」

「行きたいのはやまやまなただけど、友達と遊びに行く約束しててな。ごめん、梨沙さん」

「え？ いいよいいよ。気にしないで」

浩輔が申し訳なさそうに、梨沙に軽く頭を下げた。

「圭輔、あんまり遠くに行くなよ。梨沙さんたちはこの辺りの地理に詳しくないんだから」

もう遊びに行くことしか頭にない圭輔は、片付けをしながら適当に返事した。浩輔は「分かっただろうな」ともう一度釘を刺すように言うが、圭輔はどこ吹く風であった。

準備が終わると、浩輔以外の五人は近くの公園に向かった。遊具がちらほらとあり、薫は美沙の手を引いてブランコに向かった。俊哉も薫たちがいざ遊び出すと、張り合うようにブランコをこぎ出した。梨沙はそんな様子を微笑ほほえましそうに見つめていた。

ほんの少し、彼女の人となりがあったような気がした。

「圭輔くん、こんばんは」

夜、太鼓の練習を終えて帰ると、またしても梨沙が旅館の門

の前にいた。流石に二度目とあって、圭輔は昨日ほど驚きはしなかったが、それでも不意にかけられた梨沙の声に思わず身体をびくんとはねさせた。

「ごめん、またびつくりさせちゃったかな」

「ううん、別に」

「そっか、なら良かった」

梨沙は微笑んだ。その笑顔は彼女が、美沙たちによく見せていたものであった。眦まなじりを下げて、片方に笑窪えくぼを作った、優しい表情。その顔を見ていると、そわそわとしていた圭輔の心は静かに落ち着いていった。

「ねえ、圭輔くん、少しお話ししない？」

梨沙はそういうと、近くのベンチを指差した。圭輔は頷くと、二人並んでベンチに腰掛ける。並ぶといっても、二人の間には人の半分ほどの隙間が空いている。もちろん、圭輔が意図的に空けたものだった。

「今日はありがとう」

梨沙は小さく頭を下げた。圭輔は何のことを言っているのか分からなくて、不思議そうな顔で梨沙を見た。

「今日、美沙と遊んでくれたじゃない。美沙ね、すっごい喜んだ。あんなに楽しそうなのは久しぶりかも」

「別に、遊んだだけじゃん」

圭輔がそう言うと、梨沙は少し目を見開いた。そして、すぐ

に目を細めて笑った。

「そっか、そうだよね」

唾みしめるように言う梨沙を、圭輔はまた不思議そうに見た。

「今日も太鼓の練習だったの？」

「うん。梨沙さんは今日もお散歩？」

「ううん。圭輔くんがそろそろ帰ってくるかなって思ってた」

「え？」

意外な梨沙の言葉に、圭輔はどきりとした。

「私ね、最初圭輔くんに嫌われてるのか思ってたさ。でも、今日は、美沙にも、私にも優しくしてくれたから。お話ししたいなあって」

「嫌う？」

「なんだか圭輔くん、私を避けてるみたいだったから」

「別に、避けてた訳じゃないけど」

「そうかな、私が学校から帰ってくると、ひょいって部屋に逃げていったように思うんだけど」

「それは……」

口ごもる。確かに避けていたのは事実であった。誤魔化そうと思っても、それを上手く否定できる言い訳が思い浮かばない。圭輔は苦しい顔をして、頭を捻った。

「ごめんごめん、別に意地悪したい訳じゃないの」

「こつちこそ、ごめんなさい。本当は少しだけ避けてた。梨沙さんたちがここに来た時、梨沙さんに手を振られて、恥ずかしくて」

「恥ずかしい？」

「うん。じつと一座の人のことを見てたのがバレちゃったのが恥ずかしくて。それからずっと、恥ずかしいなって思ってた」
本当は梨沙のこゝろを見つめていたから、なのだが圭輔もそこまで素直に白状できなかった。

圭輔の告白を聞いて、梨沙は大仰おおきやうに息をついた。

「なあんだ、そんなことか。嫌われたのかと思ってたよ」

「そんなことって」

「そんなことだよ。昨日も話したけど、私たち——いや、お父さんたちは大衆演劇の役者だからね、見られてなんぼなんだよ」

「梨沙さんは違うじゃん？」

「そうなんだけどね。まあ、役者の娘だし」

「それって、関係あるのかなあ」

「関係の有無はさておき、そういう風に見えるちゃうのは仕方ないってこと。私も、そうね、美沙も一座の中にいるんだから」
そう言って笑う梨沙。先ほどまでとは違って、どこかやるせなさそうな梨沙の表情は、圭輔の心をざわつかせた。梨沙が一

度自身で否定しておきながら口にしたその言葉が、圭輔は腑に落ちず、モヤモヤとした感情が胸の内をぐるぐると巡った。

「なんとなく、分かる気がする」

ぼつりと圭輔が呟いた。

「俺も、大人たちによく旅館の次男坊って言われる。荻野圭輔って名前があるのに、ね」

「そっかあ、圭輔くんもかあ。一緒だね」

「梨沙さんは……うーん、なんて言えば良いのかな」

胸の内にある感覚を、圭輔は上手く言葉にできなかった。伝えたいという思いは確かにあるのに、言葉にできない。やるせないという感情がずしりとずしりと圭輔の肩にのしかかった。

圭輔は俯いて、敷かれた砂利を見た。

生ぬるい夜の風が二人を包む。なんとなく気まずくて、圭輔は顔を上げられないまま黙りこくっていた。

「止めようか、こんな話。つまんないし」

圭輔は頷く。

「そうそう、本当はこんな話をするつもりで圭輔くんを呼び止めたんじゃないかな」

わざとらしく、手のひらに握り拳をぼんと当て、まるで今思いついたかのような素振りをした。

「でも、もう遅いしまた今度にしようかな。良かったら、またお話ししてくれるかな？」

今度は大きく頷いて圭輔は了承する。視線を漸く彼女の方に戻すと、梨沙は嬉しそうに表情を綻ばせていた。

ふと、圭輔は昔、祖母が見せてくれた万華鏡を思い出していた。なんとなく、梨沙は万華鏡のようだと思ったのだ。ころころと表情を変えるが、その全てが華やかである。彼女が悲しそうな顔をした時は、心がざわついたし、嬉しそうな顔をした時は、心が温かくなった。彼女の表情はとかく心を動かすのだ。「圭輔くん、おやすみ。また、美沙と遊んであげてね。あと、私も」

梨沙が一足早くベンチから立つと、手を振って旅館の中に入っていった。

彼女が旅館に入っていく姿を圭輔はぼんやりと見送った。

圭輔の頭の中は、兄との会話が思い起こされていた。先日、圭輔は梨沙のことを「一座の娘」と言っていた。白々しく、自身も「旅館の次男坊」と呼ばれることに違和感を覚えると、言っておきながら、同じことをしていたのだ。

圭輔は自身を酷く嫌悪した。彼女は一度も、圭輔のことを旅館の息子、なんて言わなかったのに。

梨沙と過ごしたあの夜以降、僅かばかりの罪悪感が残っているものの、彼女への苦手意識のような感覚はすっかり霧散していた。会えば挨拶をしたし、夜、彼女が散歩に出かけていれ

ば、彼女を捕まえて話をした。

「梨沙さん」

圭輔はいつも彼女の名前を口にした。そうして、世間話を始めるのである。

梨沙は圭輔に俊哉や薫のことを訊いた。普段はどんなことをして遊んでいるのか、秋祭りはどんな感じであるのか、野球大会はいつなのか、とか。梨沙は圭輔の話すことを楽しそうに聞いていた。

一方で、圭輔は梨沙に今までどんなところに行ったのか、彼女の母親の母国はどこだったのかを訊いた。彼女は一つずつ、丁寧に教えてくれた。あれが美味しかったとか、こんな名所があったとか。

梨沙の話はどれも新鮮で、圭輔は楽しくて仕方がなかった。圭輔は家が近くだからということもあって、海をよく眺めていたが、その先にあるものを知らなかった。もちろん、海外、つまりは日本以外の国があるのは重々承知していたが、眼前に広がる少し濁った海の果てに、別の国があるとは、俄にわかには信じがたかったのだ。

外国人の客も全くない訳ではない。彼らから漏れ出る断片的な情報をかき集めても、結局圭輔の理解の範疇はんちゆうから飛び出していってしまうのだ。

しかしながら、梨沙が語る海の向こう側の話は丁寧で細かく

で、しかも実体験に基づくものしかないせいも、リアリティが感じられた。海外の話は彼女がちょうど圭輔より少し幼い頃の話であったことも、そう思わせる理由の一つだった。

圭輔は両親の仕事柄、家族で旅行することなんてなかった。祖父母に近場のテーマパークに連れて行ってもらったことが過去に何度かあるだけで、梨沙の話に出てくるようなところには一度も行ったことがなかった。

ある日、圭輔は梨沙に対して羨ましいうらやと言った。梨沙は笑って「良いだろー」と言っていたが、その瞳はあまり笑っていないように見えるなかった。

終業式が終わり、いよいよ明日から夏休みだという日の午後。圭輔は俊哉や薫、その他クラスメイトたちと共に、明日に控える野球大会に向けて練習していた。最も、普段のようにグラウンドが使える訳ではなかったので、近くの空き地でキャッチボールをするにとどまっていた。

「なあ、圭輔。梨沙さんたちはいつまでいるんだ？」

圭輔の隣で薫とキャッチボールをしていた俊哉が不意にそんなことを訊いてきた。

「盆過ぎくらいまでつて聞いてるけど」

「え！」

圭輔の言葉に大きな声で反応したのは薫だった。

「美沙ちゃんたちそんなに早く帰っちゃうの？」

薫は心底残念そうだった。圭輔も薫と同じく、寂しい気持ちがあった。梨沙と、もちろん美沙も他の一座の人たちも、旅館にいたのが当たり前になっていた中で、彼らがまるごといなくなってしまうというのは、無性に寂しいことのように感じた。

「なんだよ、お前ら一座の娘と仲良しなのか？」

そう訊いてきたのは、圭輔とキャッチボールをしていたクラスメイトの一人だった。彼が何の気なしに言った「一座の娘」という言い方に、圭輔は少しだけむっとして、投げる力が強まった。力んで投げたボールは、彼の構えていたところから逸れて、ボールは後ろに転がっていった。

「なにやっつてんだよ、圭輔」

「……ごめん」

圭輔はぶすつとした表情でぶつきらぼうに謝った。

クラスメイトが不満を垂れながら、ボールを追いかけつけてく。

「どうした、圭輔？」

俊哉が不思議そうな顔をする。

「なんでもない。ただ、かんじやっただけ」

「ふうん」

「いやいや、今まで普通にやっていたのに急に力むなんてことはないだろ。もしかして、その人のこと訊かれたくないの？」

クラスメイトは嫌らしくにたと笑いながら圭輔の顔を見た。彼はお返しだと言わんばかりに全力でボールを投げってきたが、圭輔はかろうじてそれを取ると、クラスメイトは不機嫌そうに唇をとがらせた。

「知ってるぜ、俺」

「何が？」

「姉ちゃんが、その人と同じクラスだからな。滅茶苦茶に美人らしいな」

胸がどきりとなった。

「男子たちには人気らしいぜ。姉ちゃんはなんだか嫌いつぼかったけどな」

クラスメイトは嫌みたらしく、ねっとりとした口調で言った。

人気、嫌い。酷く耳障りな言葉だった。

頬がかあつと熱くなった。さっきよりも心臓の鼓動が速くなった。

「それが、どうしたって言うんだよ」

圭輔の声は震えていた。拳に、力が入っていた。

「べつにー」

クラスメイトは意地悪く笑う。小馬鹿にするような視線を彼は圭輔に向けていた。

「なんだよ！」

圭輔は怒鳴っていた。気がつくくと、一部のクラスメイトたちが笑っていた。その様子が圭輔は酷く気に食わなかった。

「お前、その人のことが好きなんだろう」

誰かが大声でそんなことを言った。周りのクラスメイトたちはその一言に呼応して、圭輔と梨沙をからかうような言葉を口々に言った。その一つ一つは悪口という訳ではないが、からかってやろうという悪意がちらついて、圭輔は腹が立った。

「やめなよ！」

薫が圭輔を庇^{かば}うように言うと、今度は薫までもがからかわれた。近くで見ていた俊哉や女子たちが、流石にしつこいと止めに入ろうとするが、それよりも先に圭輔が最初からかい始めたクラスメイトに詰め寄って、胸元を掴^{つか}んでいた。

血が沸騰したように熱かった。握りしめた拳に力が入った。

気がつけば、圭輔とそのクラスメイトはもみ合っていた。先ほどまでからかっていたクラスメイトは流石にまずいと思ったのか、みな気まずそうに押し黙った。

圭輔が拳を振り上げると、薫が怒鳴った。

「やめなよ、圭輔！」

薫はもみ合う二人を止めようとする。俊哉も二人の間に割って入って止める。

結局、圭輔はその拳を振り下ろすことはなかった。俊哉に羽交い締めになれながら、圭輔はクラスメイトを睨^{にら}み付けてい

た。その眦からは涙が溢れていた。

怒りという感情に、悔しさや悲しさが入り交じり、ついぞ感情が抑えきれなくなっていた。

圭輔は無理矢理に俊哉から離れると、身体を翻した。

「帰る」

吐き捨てるように圭輔は言うと、辺りはしんと静まりかえった。圭輔はクラスメイトたちの方に振りかえることもなく、歩き出すと、

「ごめん、私も帰る！」

薫が慌てて圭輔の後を追った。

圭輔の隣に並んだ薫は気まずそうに圭輔の顔をのぞき込むが、圭輔は口を真一文字に結んで、不機嫌さをにじませていた。持ってきたグローブやボールを乱暴に自転車のかごに投げ込むと、遠くからこちらの様子を窺^{うかが}っているクラスメイトの顔をあえて見ないようにして、自転車をこぎ出した。

「圭輔！ 明日はちゃんと来てくれるよな！」

誰かがそう言った。

圭輔は力一杯、それこそ蹴りつけるように。ペダルをこいだ。

膨れ上がった感情が、爆発したかのようだった。ぐらぐらとはらわたが煮えくり返っていた。

「行くよね？ 圭輔」

必死で圭輔を追いかけける薫も、同じように訊いた。

圭輔は何も言わなかった。

キャッチボールをしていた公園からしばらくすると、不意に圭輔は自転車のスピードを緩めた。

「ごめん。薫」

ぼつりと呟いた圭輔の言葉に、薫は小さく頷いた。そして、先ほどまでは不安げな表情だったのが、ぼつと花が開いたように明るくなった。

「圭輔もやりすぎだと思うけど、あいつらは言い過ぎ」

薫は努めて明るく、そう言った。二人の自転車はいつの間にか止まっていた。

「少し、歩こう。私疲れちゃった」

「うん」

二人は自転車から降りると、ゆつくりと、自転車を引いて歩き出した。

「暑い……」

「そりゃ、乱暴に自転車こぐんだもん」

そう言った薫は、頬が上気していた。漸く冷静さを取り戻した圭輔は、外気の暑さと、周りで鳴いている蝉せみの声に気がついた。

「なんであんなに腹が立ったんだろう」

「そりゃあ、からかわれたら誰だって腹を立てるよ」

「違う。なんていうか……よく分かんない」

「よく分らない？」

「うん。自分のことなのに、なんか分かんないや。ただ、滅茶苦茶むかついたってことだけ」

「ふうん。それってさ、圭輔のことっていうより、梨沙さんのことを馬鹿にされたからじゃないの？」

「え？」

「私もね、聞いててむかついたもん。梨沙さんいい人なのに、馬鹿にするようなこと言って」

思い出したらまた腹が立ってきた、そう言って薫は道ばたにあった石ころを蹴り飛ばした。本来なら、優等生の薫はそんなことしないのにと、圭輔は意外に思った。

「そっか、薫もむかついたか」

「きつと、俊哉の奴も同じだと思う」

「そうかな」

「そうだよ。あー本当にむかつく。あいつのにやけ顔本当にキモかった！」

露骨に嫌悪感を表す薫に、圭輔は思わず笑ってしまった。すると、薫も笑った。

気がつけば、太鼓の練習の帰りにも通る、いつもの道だった。

「この道って、綺麗きれいだね。トンネルみたい」

薫は道路の横に立ち並ぶ木々の葉を指差す。

「確かに。葉っぱが道路を覆ってるね」

薫が言うように、大きく広がった枝葉は緑色のトンネルみたいになっている。夜見れば不気味でしかないこの道も、昼間に見るとその姿はまるで違っていた。

日差しが遮られていたせいか、涼しかった。

風が吹いた。薫の髪が揺れる。

「どうかした？」

「ううん。なんでもないよ。それよりさ——」

それからは、たわいもないアニメなどの話をしながら、二人並んで歩いた。

薫との穏やかな時間に没頭した圭輔はまた、夏の暑さと、蝉の鳴き声の煩わしさを忘れてしまっていた。

いつもよりも多くの時間をかけて、圭輔は家まで帰ってきた。結局、薫は最後まで一緒に付いてきてくれて、二人揃って旅館の裏口までやって来ていた。

ヘルメットを脱ぐと、こもっていた熱気が解き放たれ、少しばかりの清涼感を覚えた。ぼさぼさの髪を掻き混ぜながら、薫と一緒に裏口をくぐると、子どもたちが庭先でゴムまりを使い遊んでいるのが見えた。

「おかえり、圭輔くん」

子どもたちが遊んでいるのを遠巻きに見ていた梨沙が手を

振った。彼女に倣うように、子どもたちも小さな声ではあったが、「おかえり」と言った。

「女将さんが、庭でなら遊んで良いよって言ってくれたから」

不思議そうに見つめていた圭輔たちに先手を打つ形で梨沙が答えた。子どもたちが使っていたゴムまりは見覚えのないものだったので、一座が持つてきたものであるう。

「圭輔くんたちも良かったら一緒に遊んであげて」

梨沙は女の子二人に手を引かれながら、圭輔と薫にそう言った。どうしたものかと圭輔はしばし考えたが、薫に横腹を小突かれて、「うん」と頷いた。

一人の男の子がいつの間にか圭輔の足下に来て、ゴムまりを差し出した。圭輔はその男の子に笑いかけて、ゴムまりを受け取った。薫は薫で美沙や他の女の子たちに囲まれていた。

優しく、優しく、男の子が必ず掴めるようにゆっくりとゴムまりを投げてあげた。男の子は嬉しそうにこにこ笑っているので、次第に胸につかえていたモヤモヤが晴れていくようだった。

「女将さんがね、帰ってくるのは夕方ぐらいじゃないかって言ってたけど、大分早かったね。まだおやつの前だよ」

女の子たちと遊びながら梨沙がそんなことを言った。忘れかけていたことが急に蘇ってきたものだから、つい戸惑って手先が狂ってしまった。男の子の横にゴムまりは逸れて、男の子

は大慌てで取りに行った。圭輔も、あつと思つて取りに駆け上がったが、結局男の子が先にゴムまりを捕まえていた。

「何かあったの？」

梨沙は小首を傾げて、圭輔を見た。どきりと心臓が跳ね上がった、体温がじりじりと上がっていった。

困って薫を見やるも、薫も薫で苦笑いを浮かべていた。

「何かあったんだ」

「な、何もないよ。みんな、忙しいみたいで」

圭輔は苦し紛れの嘘を吐いた。薫も同調して、こくこくと頷く。

「本当に？」

梨沙はじつと圭輔の目を見つめた。気恥ずかしさと後ろめたさもあつて、圭輔は思わず視線を逸らした。梨沙は小さく息を吐いて「そっか」と小さく零した。

「まあ、もう済んだ話っぽいし、別にいいけどね」

梨沙はそう言つて、ちらりと薫の方を見た。相変わらず薫は困つてはにかんでいた。

「まあ、男の子だし、喧嘩けんかすることもあるよね」

「え！」

圭輔と薫は驚きの声をあげた。

「あ、やっぱり？」

そんな二人の反応に、梨沙は悪戯いたづらっぽく笑つた。

「圭輔くん、服が少し汚れてるし、目もちよつと赤くなつてたからね」

梨沙がそう言つと、薫が圭輔の顔をのぞき込んで、じつと目を見つめた。

「本当だ……赤い」

薫が感心したようにつぶやに呟く。周りにいた子どもたちもよく分からないだろうに、圭輔の周りにやって来て、顔を見ようとした。

「仲直りはした？」

梨沙の問いかけに、圭輔は押し黙つた。

「そっかあ。まだ、か」

「あ、あの、圭輔はそんなに悪くなくて！」

薫が圭輔を庇うように言つた。梨沙は小さく頷いて、薫の頭を撫なでた。

「分かるよ、圭輔くんは優しい子だからね」

そして、圭輔の頭を撫でた。

「でもね、仲直りは早い方がいいよ。意固地になつてると、後悔することもあるから」

梨沙は僅かに目を伏せた。子どもたちが不安そうに、梨沙を取り囲むと、また梨沙はいつもの調子で子どもたちに笑いかけた。

「何かあったのかな？」

薫が耳打ちする。圭輔は小さく首を振つて、分からないと返

した。

「私ね、仲直りができないままでお別れをした子がいるの」

「え？」

「転校の少し前に大げんかして、その子、仲良かったんだけど見送りにも来てくれなかったんだ。すっごく、悲しくてね。今でもずっと、後悔してる」

圭輔は押し黙ったまま、梨沙の話聞いた。梨沙の友達の話は今まで聞いたことがなかった。そうして、梨沙がどうしてその話を避けて、そして、圭輔には俊哉や薫の話を読み取ってきたか、少しだけ分かったような気がした。

圭輔は意を決して、

「仲直りするよ、明日、野球大会があるから、そこで」

と、梨沙の目を見据えて言った。

「うん。約束ね」

梨沙は満足げに頷いた。

照り返しがきつい夏の昼下がり。圭輔は汗をばたばたと流しながら中学校のグラウンドで野球の応援をしていた。子供会対抗の野球大会。少年野球に入っている上級生が多い圭輔たちのチームは、一回戦と二回戦を簡単に突破して、決勝である三回戦目を迎えていた。

決勝戦は、今までの一方的な試合とは違って、お互いに一回

から点を取り合っていた。

今まで出番のなかった圭輔は、そろそろ出番がくるかなと、グローブを握っている。奥では俊哉が上級生とキャッチボールをしていた。俊哉は時折グラウンドの方を睨み付けていた。

ちらりと、圭輔もグラウンドを見ると、相手ベンチが見えた。そこには圭輔と同じような控えの子たちが座っていたが、その中に、奇しくも昨日揉めたクラスメイトがいた。

圭輔はまだ、彼と仲直りはできていなかった。昨日、梨沙に約束して、圭輔は絶対に仲直りをしようと思気込んでいたが、結局なかなか話しかけられずにいて、今もまだ少しばかりモヤモヤが残っていた。

圭輔の内情とは裏腹に、試合はすがすがしいほどの乱打戦だった。どちらのチームも押せ押せで、点を取っては取り返してで、チームメイトたちは大声で声援を送っていた。そればかりか、ベンチ裏の保護者観覧席の応援も白熱したものになっており、夏の暑さとは違う異様な熱気にグラウンドは包まれていた。

二回が終わり、九対八。一点のビハインド。先発した上級生は肩で息をしていた。苦しそうに顔を歪めて、額からは大粒の汗が滝のように流れている。

「これは……」

隣で先発の上級生を見ていた俊哉が呟く。生唾を飲み込ん

で、喉がごくりと鳴っていた。

俊哉もまだ一度もピッチャーとして出番は回ってきておらず、投げたい投げたいと言っていたが、今では顔を青白くして固まっていた。

三回、マウンドに立ったのは背番号十八を背負った柳という上級生だった。球速が小学生離れした人ではあったが、次々と打ち込まれて、結局彼は一回しか持たなかった。

背番号十のキャプテンと背番号十八の二番手が打ち込まれてしまえば、次に出番が回ってくるのは必然的に三番手の俊哉だった。

「俊哉くん、行ってくれるね」

監督に肩を叩かれて俊哉は項垂れる。一回戦の頃とは人が変わったようだった。

四回の表、俊哉の初マウンドは大方の、親友である圭輔も予想していた通り、大いに打ち込まれた。

グラウンドに立ちこめる異様な熱気と雰囲気に吞まれてしまったのか、ボール気味の投球になってしまい、ストライクを取ろうとして甘く入った球を全て打ち返されていた。

それでも、控えのピッチャーが同じく三年生の子だけになり、監督は苦し紛れに俊哉に回またぎをさせた。圭輔はそんな友人の熱投を、テレビで甲子園を見ているような気持ちで応援していた。

不幸中の幸いともいうべきか、裏の攻撃では上級生たちが必ず点を返してくれていたから、点差は縮まることはなかったが、開くこともなかった。

五回の表をなんとか切り抜けた俊哉は満身創痍でベンチに戻ってきた。お疲れと声をかけて圭輔はスポーツドリンクを俊哉に手渡す。

「お前、何普通に野球観戦してんだよ」

「なんていうか、俺が出るチャンスないなあって」

「なんだよ、それ」

疲れているのか、呆れているのか。俊哉はため息を零すと、監督が用意していた折りたたみ椅子に腰掛けた。

めまぐるしく動く試合でなかなか出番が回ってこないから、と言うのもあるが、圭輔は仲直りの件も頭の中にあって、いまいち自分も野球の試合をしているという気にはなれなかった。

「そーいや、聞いたか？ センターの司くん、手を擦り剥いたらしいぜ」

「え？」

「控えに上級生いるから、その人が代わりに出るみたいだけどさ。もしかしたらお前にも出番回ってくるかもな」

「いや、そんなことはないでしょ、多分。俊哉が頑張つてよ」

「他人事だなあ。出番が欲しいって言つてたくせに」

「俊哉だって、さっきは嫌そうだったじゃないか」

「まったく」

俊哉はまた、ため息を吐いた。

「せっかくのチャンスなのになあ」

「何が？」

圭輔は俊哉が指差す方を見る。チームメイトの母親がこちらを見守っている中、見知った顔を見かけた。

「なんで……」

「そりゃあ、俺たちを——いや、お前を見に来たんだろうよ」

俊哉がにやりと笑って言った。圭輔の視線の先には、圭輔の母親や薫と共に、梨沙がいた。梨沙はずっと圭輔を見ていたらしく、圭輔と視線が重なった。彼女はいつもの笑顔で圭輔に手を振った。

「な、梨沙さんたちも見てるんだし頑張れよ」

「う、うん」

圭輔の声は震えていた。いや、震えていたのは声だけではなく、手も、膝も震えていた。かたかたと隣に座っていた俊哉に振動が伝わるのではないかというほどに、震えていた。

梨沙が見ている。そう認識すると、身体が揺さぶられたような心地がした。

俊哉は心配そうに圭輔の顔をのぞき込んだ。先ほどまで夏の暑さにやられて赤くなっていた圭輔の顔は、どこか青白くなっていた。

「おいおい、大丈夫かよ」

見かねて俊哉が監督に声をかけようと立ち上がったのを、圭輔がなんとか振り絞った力で止めた。

「無理はするなよ。日射病かもしれんぞ」

「大丈夫……大丈夫……」

相変わらず震えた声で大丈夫と繰り返す圭輔に、思わず俊哉は苦笑して、クーラーボックスからスポーツドリンクを投げ渡した。

「なら、頑張れよ」

圭輔は静かに頷きながら、ペットボトルの蓋を開けた。ごくごく喉を鳴らしながら、スポーツドリンクを飲んだ。半分ほどを一息に飲むと、いくらか身体の震えは収まり、心も落ち着いていた。

しかし、試合は六回の裏まで来ていた。点差は二点のビハインド。この回は四番からの攻撃で、四番五番が連続安打で簡単に一点差に詰め寄ったものの、六番の俊哉が三振してワンアウト。悔しそうな表情でピッチャーを見つめていた。

ベンチに戻ってきた俊哉の言い訳を聞きながら、圭輔は予感めいたものを感じて、腹に力を入れていた。おそらくきつと、そうなれば良いなという期待のようなものでもあった。

心臓がとくとくと鼓動を速めていた。ちらりとネット裏を見た。流石に梨沙は圭輔ではなく、打席の方を見ていた。

七番は、粘って粘って粘りきって、左中間のツーベースを打って二、三塁とした。八番のところ、監督は代打を指示した。一瞬来たかと身構えたが、呼ばれたのは背番号十二の四年生。彼は先ほどまでの圭輔と同じく、緊張した顔持ちで打席へと歩いて行った。

初球を見逃して、二球目。バットを長く持った彼は力一杯振り抜いた。しかし、芯で捉えることはできずに、セカンドライナー。勢いのある打球ではあったが、相手チームのセカンドは身体を使って上手く捌いた。

圭輔はアウトを取られたのをしっかり見てから、監督の方を向いた。監督も同じようにこちらを見ていたようで、視線がぶつかる。監督は大仰に頷いて見せた。

「圭輔くん、代打に行ってくれるか」

大きな声で、圭輔は返事した。監督の指示を聞いたチームメイトたちは上級生も下級生も関係なく、口々に頑張れと声をかけてくれた。気がつくくと、俊哉がバットを持ってきてくれた。渡されたバットを圭輔はしっかりと握りしめると、気合いが満ちてくるのが感じられた。

打席に向かう圭輔の背中を、俊哉はバチンと叩いて送り出す。

「三振だけはなしだからな」

俊哉の言葉に、圭輔は力強く頷いた。

六回の裏、ツーアウト二、三塁。圭輔は先ほどまでとは打って変わって、燃え上がるような闘志で打席に立った。少年野球のチームに入っている訳ではない圭輔にとっては、人生で初めての対外試合の打席だった。

ネット裏を見ると、梨沙は祈るようにしてこちらを見ていた。期待に応えたい、そう思った。

この打席は本来ならば、圭輔よりも二回りも身体が大きく、足も速くてバッティングも上手い六年生が入るはずだった。ベンチを見やると、その六年生が圭輔に声援を送ってくれていた。

グリップを握る手の力が一層強くなる。なんとかしてランナーを帰すんだ、圭輔はそう強く思った。

初球、高めに浮いた球はボールになった。相手ピッチャーは大柄な五年生。マウンドに立つ姿は威圧感に溢れていた。

二球目はストライク。初球よりも球が速く感じた。ベンチからは振っていい振っていいという声がかけられる。

三球目、思いつき振って空振り。当てに行つたのに、ボールよりも大分上を振つたことに、圭輔は戦いた。

もう追い込まれてしまった。またしても、弱気な自分が圭輔の胸中で鎌首をもたげようとしていた。

けれども、圭輔はもう一度心を奮い立たせた。ネット裏、梨沙はつきりとは聞こえなかったが、「頑張れ」と声援を送って

いる。圭輔はバットを短く握り直し、深呼吸をした。

ゴロを打て、と心の中で念仏のように何度も繰り返した。フライじゃなきゃなんともかなる、そう思いながら四球目をしっかりと引きつけながら打った。

あ、と思わず声が漏れた。圭輔の放った打球は無情にも山なりのフライ。サードがグローブを天に突き上げて後退している。

——打てなかった。

打球の行方を見ることをやめ、俯うつむきながら一塁をめがけて走った。自身のアウトを悟りながらも、せめて精一杯やろうと圭輔は全力で走る。

しかし、突如として味方ベンチから歓声が沸き起こった。何事かと圭輔が顔を上げると、相手チームのレフトがボールを拾い上げてホームに送球しようとしていたのだ。圭輔は一塁で止まると、ホームを見た。一塁ランナーがギリギリでホームインしていた。訳も分からずきよるきよると忙まわしく辺りを窺うかがっていると、相手チームのファーストが、「ポテンヒット。ラッキーな奴」と耳打ちした。

ヒットであると漸よやく理解した圭輔はベンチを見た。俊哉をはじめ、チームメイト全員が立ち上がって喜びあっていた。その後すぐ、ネット裏も見た。薫と梨沙が今にも飛び上がらんとばかり喜んでいた。梨沙は今までに見せたことのないような、子

どもつばい表情で笑っていた。その姿を見て、圭輔は心の底から、「ああ、良かった」と安堵あんどしたのだった。

その後の自チームは圭輔のラッキーヒットで勢いづいたのか打者一巡の猛攻。残念ながら二打席目は空振りの三振だったものの、大きなリードをつけたまま最終回を迎えた。

圭輔はそのままセンターの守備に入り、俊哉の背中を外野から見つめた。攻守交代の際、俊哉が「最後は三人を三球三振で締めてやる」と息巻いて入ったマウンド。相手チームが戦意を喪失さうしつしていたこともあって、三連続三振とはいかなかったが、三者凡退ぼんたいで試合を締めくくった。

ゲームセットの合図と共にセンターからマウンドに駆けつけていき、圭輔は俊哉の脇腹を小突いた。

「やるじゃん、俊哉」

「お前もな、ラッキーボーイ」

「なんだよ、ラッキーボーイって」

「ポテンヒットのくせに偉つそうにしやがって」

二人で小突き合いながら、列に並ぶ。互いに健闘を讃たたえ合う中、圭輔はずっと、昨日喧嘩したクラスメイトを見ていた。

両チームが一礼をし、ベンチに戻っていく中、圭輔は件のクラスメイトの方に駆け寄っていった。

クラスメイトも、圭輔に気がついたのか近寄ってきたものの、二人は対面したまま、しばらく黙りこくっていた。お互い

に自身の悪かったところを自覚しているせいか、気まずかったのだ。

「あのさ」

口火を切ったのは圭輔だった。圭輔は頭を下げて、「ごめん」と謝った。もとはと言えば、圭輔が乱暴にボールを投げたことから始まった喧嘩だったし、最初に手を出したのも圭輔だった。

クラスメイトは驚いたのか、目をぱちくりとして圭輔を見つめていた。

「俺も、ごめん。からかいすぎたよ」

そして、クラスメイトも圭輔と同じように頭を下げて謝った。二人して頭を下げたまま固まっているのは端から見れば珍妙な光景であつただろうけれど、二人にとっては至つて真面目なことであつた。

しばらくして、どちらからともなく笑い声が漏れてきた。二人は顔を上げて、笑い合った。

「本当、悪かったよ」

これでもう、二人の間にはわだかまりというものが消えてなくなつていた。

「しかし、お前ラッキーだな。絶対アウトだと思つて、笑つたのに」

「なんだと！」

「俺だったらあの場面はホームランだったな」

「ふん。よく言うぜ、一回も出番なかつたくせに」

「何！」

二人して、小突き合う。昨日のような取っ組み合いではなく、冗談めいたじやれ合いみたいなものだった。気がつくくと、俊哉や他のクラスメイトたちも近くにいて、笑つていた。昨日いたクラスメイトもまた、口々に謝つた。これでもう、喧嘩はおしまひ。いつもの友達に戻つていた。

その後、閉会式でチーム全員に金色のメダルが配られて、大会も終わった。圭輔も、おそらく俊哉たちチームメイトや梨沙たちも予想だにできなかっただろう劇的な幕引きに、今日一日に疲れはどこかに飛んでいってしまった。心につかえていたモヤモヤも消えて、圭輔はただ、充実した心地よさに酔いしれていた。

「圭輔くん、今日はどうもかつこよかったよ」

夕方、たまたま旅館の中で会つた梨沙に声をかけられた。梨沙は試合後の興奮を引きずつていたのか、いつもより少しばかり大きな声だった。

圭輔も圭輔で、どこか落ち着かない心地だった。もうすっかり梨沙とおしゃべりすることに抵抗はなくなつていたはずだったのに、どうにもそわそわしてしまう。

「あーあ、ちびたちも連れて行けば良かった」

心底残念そうに梨沙は言った。そこでふと、疑問に思っていたことを圭輔は彼女に訊ねた。

「そういうえば、梨沙さんよく試合を見にこれたね。良かったの？」

「何、圭輔くん。私が応援に来たの嫌だった？」

梨沙の意地悪に、圭輔は大慌てで首をぶんぶんと横に振った。圭輔は決して口には出さないが、ネット裏の梨沙の姿を見て、頑張ろうと、前向きな気持ちになれたのだ。むしろ、よく来てくれたと思っていた。

「そういう訳じゃなくて、あのね」

「分かってるよ。まあ、薫ちゃんが誘いに来てくれたし、なにより今日はね、お昼の公演なかったんだ」

「お休みの日なの？」

「お休みの日だからじゃん」

どうにかみ合わない会話に首を傾げる圭輔。もちろん、梨沙は分かかって言っていた。

「まあ、世間にお休みの日は、一座にとつてはお仕事の日、だよな。でも、流石にずっとは働けないからねえ」

「……大変？」

梨沙は困ったように苦笑を浮かべ、小さく「うん」と頷いた。そして、気怠そうに大きいため息を一つ。

「でも、それが私にとつての普通だからね。今日が特別」

「普通……梨沙さんにとつての普通って俺の普通と一緒？」

「どうかな。同じ普通もあれば違う普通もあるってことかな」

「普通って、いくつもあるものなの？」

「十人十色って言ってね、それこそ人の数だけあるんじゃないかな。まあ、計算式が如何にシンプルで美しいか痛感させられるよ。ロジックじゃないってね」

圭輔は頭を捻った。彼女の言うことを、彼女が言わんとしていることを、圭輔は十分に理解ができなかったのだ。

「よく分かんないや」

「ごめんね。でも、私もよく分かんないから」

「変なの」

圭輔は壁にもたれて、つまらなそうに両手を弄んだ。

「ま、こんな面白い話は止めて、楽しいお話をしようよ」

今日は圭輔くんがヒーローになった日なんだから」

「ヒーロー？ そんな大層なものじゃないけど」

ヒーローという言葉に、圭輔は内心舞い上がってしまいそうだったものの、顔には出ずまいと、あえてぶつきらぼうに言った。そんな圭輔の心情はお見通しだったようで、梨沙はくすりと笑った。

「あ、そういうばさ。仲直りってどうなった？ できた？」

「もちろん」

親指を立てて、圭輔は誇らしげに言った。すっかり仲直りできた彼とは遊ぶ約束もしている。

「よかったよかった。心配だったんだ、まだ仲直りできていなかったらどうしようかなって」

「え、梨沙さん心配してたの？」

「そうだよ。私だけじゃなくて、薫ちゃんも、ちびたちも。それはもう滅茶苦茶に心配したんだから」

梨沙は圭輔の頭をくしゃくしゃと撫で回した。柔らかな彼女の手のひらに、圭輔はこそばゆさと心地よさを感じて目を細めた。

圭輔はいつの間にか、梨沙に頭を撫でられるのに慣れてしまっていた。普段から子どもたちの面倒を見ているせいとか、梨沙は癖のように頭を撫でてきた。最初のうちは恥ずかしさから嫌がりもしたが、今ではもう抵抗することもなくなっていた。

「梨沙さんってさ、先生とか保母さんみたいだね」

「先生？」

「うん。なればいいのに、向いてると思う」

「そう？　じゃあ、なっちゃんおうかな」

「え？」

思わぬ反応に、驚いた圭輔はもう一度度聞き返した。

「そんなに変なことかな」

「だって、梨沙さん役者さんになりたいんだと思ってた」

梨沙は僅かに目を見開いて、「どうしてそう思ったの？」と訊いた。

「梨沙さんの話し方とか、動きとか、とにかく雰囲気役者さんぽいなって」

「ふうん、なるほどねえ。そっかあ、わざとらしくったかあ」

「あ、いや、そんな悪い意味じゃなくてね。あの、その」

落ち込む素振りを見せる梨沙に、圭輔は必死になって頭を使って褒め言葉になるであろう言葉を考えた。けれど良い言葉が思い浮かばず、わたわたと慌てる。

「いいよいよ。別に悪口って訳じゃないんだから」

慌てる圭輔を梨沙は慰めるも、彼女の声は彼の耳に届かなかった。どうしようかと梨沙が困っていると、急に圭輔が何かを思い立ったように、あ、と声をあげた。

「そうだ。前ね、梨沙さんを見てて思ったことがあるんだ」

「私を？」

「あー、なんていうかね」

いざ言おうとすると、圭輔は照れてしまつて、なかなか言葉が出てこない。梨沙はきよとんとした顔で圭輔を見つめていた。梨沙の視線に思わずたじろぐも、圭輔は意を決して言った。

「万華鏡みたいで、綺麗だなんて」

言葉尻は小さくなつてはいたが、圭輔はしっかりと言い切った。

「ふうん……え？」

圭輔の言葉に、今度は梨沙が素つ頓狂な声をあげた。気恥ずかしそうに、髪の毛の先を指で弄りながら苦笑する。

「あ、いや、綺麗だなんて言ったのは薫で。ああ、いや、俺も——」

「うんうん、分かってるって」

そう言っつて、梨沙はまた圭輔の言葉を遮るようにして、頭を優しく撫でた。

「万華鏡ね。初めて言われたかも」

「なんて言ったら良いのかな。梨沙さんはさ、ころころと色々な顔をするけど、全部、嫌な感じがしないし、むしろ綺麗だから万華鏡みたいだなあ……」

圭輔は言っているそばから恥ずかしくなったのか、また言葉尻が弱くなっていた。自分が何を言っているのか、冷静になつて気がついたのだ。なんて小つ恥ずかしいことを言っているのだろうと。気恥ずかしさから、圭輔は俯いて、上目遣いで梨沙を見た。

「ありがとう。確かに、そう言われると悪い気がしないかな」

梨沙はわざと口角を大きく上げてにこりと笑った。その表情はまさしく、花が咲くようなものであった。

圭輔は血が冷たくなるような心地がした。そして、すぐに、沸騰してしまうんじゃないかと思うほど、身体がかあつと熱く

なった。

「圭輔くんはお話が上手だね。また、お話聞かせて欲しいな」
そう言っつて、梨沙はちらりと旅館の時計を見た。

「ごめんね。ちびたちがそろそろお昼寝から起きる頃だから、もう行くね。今日も太鼓の練習はあるのかな、頑張っつてね」

梨沙は手をひらひらと振っつて、圭輔と別れた。圭輔も手を振っつて彼女を見送っつていった。

しかし、梨沙は急に立ち止まっつて、翻っつて圭輔の方を見た。
「私ね、本気で教師になろうかなっつて思っつちゃった」

それだけ言っつと、梨沙はまた身体を翻っつて歩き出した。圭輔は呆氣に取られ、ぼかんとしつて彼女の後ろ姿を見つめる。なぜだか、心臓がとくとくと高鳴っつていた。

「不思議だ」

圭輔はこれまでに経験しつたことのない、正体不明の感情を抱いていた。わざとらしく、腕を組んでみるが、答えは出てこない。

ふと、今日仲直りしつたばかりの級友と喧嘩しつた時のことを思い出した。あの時、級友が圭輔に言い放つた言葉を思い起こしつて、圭輔はまた頬が林檎のように真っ赤になつた。

ぐるぐると回る頭が落ち着きを取り戻すために、しばらく圭輔は呆然と立ち尽くすことになつた。

「なあ、俊哉。超大事な話がある」

そう言って、圭輔は太鼓の休憩時間に俊哉を呼びつけた。わざわざ他の人が入ってこないような空き部屋に入るといいうとう圭輔なりの徹底振りに、俊哉も何事かと訊いた。

「もしかしてさ」

「うん」

「俺って、梨沙さんが好きなのかな」

「え、今更？」

「は？」

思わぬ俊哉の反応に、圭輔は驚いた。梨沙と別れた後、自室で散々に悶々と悩み抜いた結論を、俊哉はさも当たり前と言わんばかりに返答したのだ。

圭輔は大慌てで俊哉に詰め寄って、俊哉の肩を揺らした。

「なんかすっげーびっくりしてるみたいだけど、普通分かるって」

「本当に？」

「いや、まあ。薫とかは俺よりも前に気がついていただろうけどさ」

「まじかあ……」

圭輔は愕然とした。俊哉だけならまだしも、薫まで知っていたとなると、なんだか無性に恥ずかしくなった。

「むしろ、気がついてなかったのかよ。あんなにべたべたして

るからわざとかと思ってた」

「だって、こんなの初めてだったんだし」

「え、初恋なの？」

「そうなるのかな、今まで好きな人いなかったし」

「へえー」

「え、というか俊哉も好きな人いるの？」

「は？」

今度は俊哉が面食らったような顔をした。

「俺のことは別にどうでも良いだろ」

「俊哉は不機嫌そうにそっぽを向いた。」

「俺の知ってる人？」

「だから、俺のことはどうでもいいだろ！」

「えー気になる！」

圭輔はしつこく俊哉に絡んだが、俊哉はまったく相手せず、もたれ掛かる圭輔を押しつけた。

「で、梨沙さんが好きで、何なの？」

「え、いや。梨沙さんが好きなかなって、思ったから訊いただけなんだけど」

「え、それだけのことで呼んだの？」

「いや、それだけって、超重要なことじゃん」

「超重要って、そんなことかよ……」

俊哉は呆れたようにため息を吐いた。

「俺はてっきり告白でもするのかと思つた」

「はあ、告白？」

告白、俊哉の言葉に圭輔は梨沙に告白する光景を無意識のうちに思い浮かべていた。結果はもちろん、成功であった。

圭輔は顔を真っ赤にして首を振つた。

「だってさ、好きな子がいるってわざわざ報告するってことはさ、告白するってことなのかなって」

「告白、だなんて」

圭輔はもじもじとして、身体を縮こまらせた。

「成功するかな」

「やってみなきゃ分かん。というか、やるの？」

「うーん。でも、どうしようかな」

「まあ、好きにすれば良いよ」

そう言つて、俊哉はおもむろに立ち上がった。

「さ、もう休憩終わるし戻るぞ」

時計を見ると、休憩時間が残り三分であった。圭輔も慌てて

立ち上がると、俊哉の隣に並ぶ。

「また、相談していい？」

「別に良いけどさ」

「あ、薫にも聞いてもらおうかな」

「それは止めとけ」

「どうして？」

「どうしても！」

俊哉と話して以来、圭輔はまたしても梨沙を避けるようになっていた。避けると言つても、わざわざ梨沙を捕まえて雑談をするのを控えただけで、完全に接触を避けようという訳ではなかつた。向こうから話しかけてくる以外は遠巻きに見て、機会を窺^{うかが}つていたのである。

それでも、美沙たちとは俊哉や薫と遊んでいたし、遊びに誘つたりもした。その場にはもちろん、梨沙もいた。

告白云々はとりあえず棚上げして、少しでも冷静になろうとしていたのだ。

梨沙は梨沙で、最近圭輔が話しかけに来ないことを気にはしていたものの、特段何かをするという訳ではなかつた。

そんな日々が何日か過ぎ、いつの間にか八月になっていた。流石にこのままはずいと思つた圭輔は、何の気なしに夜、

梨沙が散歩している時間帯を見計らつて家を出た。

裏口から周り、旅館の方に出ると、いつものように梨沙はベンチにかけて海をぼんやりと見ていた。

梨沙さん——そう言つて、圭輔もいつものように声をかけようとして、立ち止まつた。

浩輔がふらりとやつて来て、梨沙の隣に腰掛けたのだ。前のめりになつた圭輔は慌てて物陰に隠れた。

何をしているのだろう。物陰から二人を窺うが、夜闇に紛れて定かではない。

時折聞こえる笑い声から、二人は雑談を交わしているのだと気がついた。それならば俺も混ぜてもらおう、そう思って再び歩み出して二歩、また圭輔は足を止めた。彼らは立ち上がり、どこかへ歩き出してしまったのだ。

圭輔は不思議と心がざわついた。

冷や汗をかいて、体温が失われていく。

慌てて二人を追いかけた。

二人は海岸線をゆっくりと歩いていった。浩輔が一步先を歩いて、梨沙がその後を追う形だった。さらにその後ろには圭輔がいたのだが、二人は圭輔に気がつかないようで、まるで二人だけの世界だと言わんばかりだった。

ふと、浩輔が歩みを止めた。梨沙も、歩みを止める。圭輔も彼らの声が聞こえるギリギリのところまで身を隠した。

浩輔は気まずそうに黙りこくって、梨沙を見つめた。

静かな夜の海は波が寄せて返る音だけが聞こえて、他には何も聞こえない。だからだろうか、圭輔は自身の心臓がはち切れんばかりに拍動はくどうしているのに気がついた。

梨沙の長い髪が海風で揺れた。

梨沙が煩わしそうに、髪を直したその時だった。浩輔は躊躇ためらいと緊張にまみれ、揺れ動く瞳を、一直線に向けて、言った――

圭輔は走り出していった。今すぐにこの場所を離れなければいけないと、とにかく全力で走った。

海岸から旅館までの、それなりにある道を、一度も足を止めることなく走りきった。家に入れば、すぐに自室に入り、布団に丸まった。

バクバクとなる心臓をなんとか落ち着けようと、深呼吸を繰り返すも、一向に落ち着く気配はなかった。

圭輔は布団の中でもだえた。枕に顔を押しつけて、声にならない声を出した。

じたばたと足を布団に叩きつけた。

『男子たちには人氣らしいぜ』

いつだったかの言葉が、圭輔の頭の中をぐるぐると回った。信じられなかった、信じたくなかった。圭輔が梨沙に向けるのと同じ感情を、兄である浩輔も向けていたということに。

布団にくるまって、本来ならば暑くてたまらないはずなのに、圭輔の身体はガチガチと震えていた。

震える、もだえる。

この世の終わりのような気分だった。

圭輔は、梨沙を好く人の存在をまるで考えていなかった。中学校にすでに想い人がいるかもしれない。もしかしたら、どこか違う町に好き合った人がいるかもしれない。

そんな考えが、涙と共にあふれ出てきた。

なぜ、無条件に好意を受け入れてもらえると思っただのらう。間拔けな自分に、圭輔は強く嫌悪する。

不意に、どんどんと階段を上る音が聞こえた。

圭輔は飛び上がって、ドアを開けて廊下に出る。

「どうした、圭輔」

浩輔はきよんとした表情で圭輔を見た。

浩輔は至って普通だった。しかし、圭輔にはその普通な兄がたまらなく怖かった。

「兄ちゃん、あのさ、えっと、漫画貸して」

「もう遅いから、明日な」

そう言っつて、浩輔は自室へと入っていった。

圭輔はこの日以来、自室にこもりがちになっていった。俊哉や薫が遊びに行こうと誘いに来て、圭輔はほとんど断った。時に、強引に連れ出されても、圭輔はいつも上の空で、つまらなさそうだった。心配に思った薫が何度も何度も「何かあったの」と訊ねたが、圭輔は生返事をするばかりで、薫は手をこまねいていた。

事情を半分ほど知っている俊哉は、そんな薫に「放っておいてやれよ」と言っつた。俊哉も、どうした方が良く分からず困っつてはいたが、こういう時は放っつておいて方がいい、そう思っつたことだった。

こうして、時間ばかりが無為に過ぎていった。

こんこん、とノックする音が聞こえた。

時刻は夕方、圭輔は相変わらずぼうつとして、つまらなさげに漫画本のページをめくつていた。

もう一度、こんこんとノックの音がした。

「圭輔くん、いるかな？」

ピクリと身体が動いた。ドアの向こう側にいるであろう人の姿を思い浮かべて、圭輔はまた、漫画本のページをめくつた。

三度目のノック。今度は短く強いものだった。

「入るよ、いいね？」

そう言っつて、梨沙は圭輔の部屋に入つてきた。窓から差し込む夕日に照らされた梨沙の表情は、浮かぬものであった。

怒られるのかな、と圭輔は漠然と思つた。薫辺りが、叱つてくれと頼んだのかな、とか、それとも兄が頼んだのかな、と彼女をけしかけた人を想像した。

しかし――

「圭輔くんは、私のこと嫌いになつちやつたの？」

彼女の言葉は、圭輔にとつて予想外の言葉で、「え」と圭輔は声を漏らして、そして、戸惑つた。

決して、梨沙が嫌いという訳ではなかつた。むしろ、今でも梨沙のことは好きで、でも、梨沙は浩輔と付き合つてるから、二人の間に入ることはできなくて、梨沙に話しかけることもな

んだか躊躇われて。

圭輔の胸中を様々な感情が渦巻いた。それらは言葉となつて発露はつろすることなく、ただ沈黙が続くばかり。

否定も肯定もしない圭輔に、梨沙の表情はますます曇つていった。今の梨沙の表情は、圭輔が万華鏡のようだと口をつた梨沙の顔ではなかった。

圭輔はチクリと胸が痛むのを感じた。今、梨沙の顔を曇らせているのは自分だと思つて、また、チクリと胸が痛んだ。

「誰かに、何か言われたの？」

圭輔はただどしく、そう言った。

梨沙は頭を横に振った。

「じゃあ、どうして？」

「私が、圭輔くんに嫌われたまま、お別れしたくなかったから」

「お別れ……」

梨沙の言葉を繰り返す。

「そう。お盆が来たら、私たちはここを出て行くから」

「そっか、そうだよね」

「うん。お別れが近いのに、喧嘩、じゃあないけど、仲が悪いままお別れしたくないから」

再び、梨沙が口にした「お別れ」という言葉。そのあまりにも重たい響きに、圭輔は心臓をわしづかみにされたような心地になった。

ぼとり、と圭輔の手の甲に水滴が落ちる。そして、そこから何度も何度も、胡坐あぐらをかいて膝の上に置かれた手の甲に、水滴が落ち続けた。

梨沙は慌てて、圭輔の顔をのぞき込んだ。「どうしたの？」そう言つて、心配そうに圭輔の瞳を見つめた。

「梨沙さん、のこと、全然、嫌いじゃ、ない」

圭輔はしゃくり上げながら、梨沙のことは嫌いじゃない、と繰り返した。

圭輔の涙は止まることなく、延々と流れ続けた。

泣きじゃくる圭輔の前に、梨沙はゆっくりと近づいて行つて、そつと抱きしめた。梨沙の胸の中で未だ顔をくしゃくしゃにして泣き続ける圭輔とは対照的に、梨沙自身はいつもと同じ、穏やかで優しく、華やかな笑顔を浮かべている。

梨沙は小さく息を吸い込むと、小さな声で歌い出した。彼女の歌は、日本語ではなかった。異国の、おそらく、彼女の母親の国の歌だった。ほとんど聞き取れなかったが、その透き通る彼女の声は、圭輔を優しく包み込んだ。

トウラ、ルラ、ルラル、トウラ、ルラリ、トウラ、ルラ、ルラル。やつと聞き取れたフレーズ。

圭輔はそのフレーズとメロディを胸の内でも繰り返した。柔らかくて、温かい心地だった。彼女の歌声が、すうっと胸の中で広がって、いつしか圭輔は泣き止んでいた。

梨沙が歌いきると、圭輔はそつと彼女から離れた。泣いたせいか、それとも梨沙に抱きしめられたせいかわからない、圭輔の頬は夕日に負けないくらい、朱に染まっていた。

「何の歌？」

「これはね、子守歌。昔、お母さんが歌ってくれた歌」

「子守歌……」

「といつても、お母さんは寝かしつけるといふよりは、ぐずった私をあやすために歌っていたけど」

梨沙は悪戯めいた口調で、「ちようど今みたいにね」と付け加えて、圭輔はふいとそっぽを向いた。

「それで、なにがあったの？」

居住まいを正して、梨沙が圭輔に訊いた。圭輔も梨沙につられて、思わず正座した。

「別に、何にもないけど」

「こんなになんわん泣いて、そんなことはないでしょ」

「いや、その……」

圭輔は言葉に窮した。今更ながら、梨沙に対する気恥ずかしさが蘇ってきて、軽々しく理由を言うことはできなかった。

しかし、梨沙があまりにもじいっと見据えてくるものだから、圭輔は参ってしまった、ついで観念した。

「兄ちゃんが、梨沙さんに告白したから……」

圭輔は投げやりにそう言った。もう、どうにでもなれという

気分だった。

「兄ちゃんと、梨沙さんが付き合っちゃったから、もう、梨沙さんとはお話ししたり、遊べないと思って」

「兄ちゃん……って、浩輔くん？」

「うん」

「誰かがそんなこと言ってたの？」

「ううん。実はね、兄ちゃんが梨沙さんに告白してるところ見た」

「え、ああ……圭輔くん、見てたんだね」

恥ずかしいところを見られたなあ、と梨沙は困ったように苦笑いを浮かべた。彼女のそんな態度にまた、胸がチクリとした。

「あのね、圭輔くん。私と浩輔くんは別に恋人同士じゃないよ」

「え？」

「圭輔くんがどこまで見ていたかは分からないけど、私は浩輔くんに、ごめんなさいって返事をしたの」

圭輔は急速に身体が熱を帯びていくのが分かった。

「付き合っていないの？」

梨沙は相変わらず苦笑いを浮かべたまま頷いた。

結局、自身が勘違いをしていただけだと梨沙に告げられて、今までの日々は何だったのかと圭輔は後悔した。

しかし、それはそれで、圭輔にはまた疑問が生まれた。

「……兄ちゃんのこと、嫌いだった？」

「別に嫌いじゃないよ」

「じゃあ、どうして？」

「どうしてって言われると困るけどね。なんていうか、嫌いじゃないから、その人が好き、ってことにはならないでしょう？」

「そう、かも。ううん、そうだね。クラスでね、滅多に話さない女子が何人かいるんだけど、別にその子たちのこと、嫌いで好きでもない」

「そう、まさしくその通り」

なんとなく腑に落ちた。確かに、好きでもなければ、嫌いでもない。そういう感情はある。これは色恋にもそのままあてはまるのだが、圭輔はどうにも零か百かで考えていたようだった。

「まあ、でもね。もし、私が一座の娘じゃなくて、ここに住む普通の子だったら、断ってなかったかもしれないけど」

「え？　好きじゃないんでしょ」

「そこから、好きになるかもしれないじゃん」

梨沙はあっけらかんとそう言った。

「そういうものなの？」

「そういうものなんじゃないの？　私もよく分かんないんだけど」

「梨沙さんも分かんないの？」

「うん。だって、今まで付き合ったことないし」

「そう、なんだ。慣れっこなのかなって思ってた」

「残念ながら、ね。全部、断ってきたの。そういうつもりなかったから」

「彼氏、いらないの？」

梨沙は少し首を傾げて、そして、横に振った。

「欲しい欲しくないと言うより、結局ね、環境、なんだよ。お父さんたちに付いて各地を巡っている内、お父さん風に言う旅行者である内は無理でしょうね」

「旅人……」

「そう、急に来て、一ヶ月ぐらいで去って行く人。そんな人と恋人になってどうするのって」

「お話ししたり、遊びに行ったり」

「そうね、確かにできるよ。また、明日ってもう一度お話ししたり、遊んだりできる。でも、その繰り返しは必ず、終わりがくる。遊びたくても、もう次の町に行かなきゃってなる日ばかりと来るでしょ」

「あ、確かに……そうだね」

圭輔はいつだったか、俊哉が言っていたことを思い出していた。梨沙が、旅の一座が去って行くのはすぐだって。そして、寂しくなるって。

「一ヶ月って、本当に短い。あつという間。二ヶ月だって、短いと思うもん。だから、私は嫌なんだ」

漸く、圭輔は梨沙が言わんとすることが分かった気がした。すぐ別れてしまう、そして、すぐ忘れられてしまうのに、彼女に限らずとも、大切な人を作る気にならないという、梨沙の気持ちだ。

「みんな、決まって言うんだ、絶対に忘れないって。そんな訳ないのにね」

梨沙は目を伏せてそう言った。

「私ね、圭輔くんが羨ましいんだ」

「俺が？」

「そう。こんなに穏やかな故郷があつて、俊哉くんや薫ちゃんみたいなお友達がいて、子供会で野球大会ができて、秋にはお祭りがあつて。本当、羨ましい」

梨沙の声が少しづつ弱くなつていく。悲しみに満ちた声で、彼女は続けた。

「私は、そんな普通が欲しかった」

大きく、深く、梨沙は息を吸って吐いた。

「前に、圭輔くんは私が将来お父さんみたいな役者になりたがつてる、みたいなことを言ったよね。私は、私の夢は、どこか安住の地を見つけて、腰を落ち着けること。もう、旅して回るのほりごり」

だから、お父さんみたいな役者にはなりたくない、そう彼女は強く言った。

はつきりとした拒絶の言葉だった。怒り、悲しみ、苦しみ、様々な感情がない交ぜになつただろう、彼女の心は表情に滲み出していた。彼女の瞳を見ると、圭輔もまた無性に悲しくなつた。

「梨沙さんは、どうしてそう思うようになったの？」

「そうね、ある時、ふとね。あ、私には無理なんだって思っちゃつたからかな」

「どういうこと？」

「圭輔くんには、前に話したよね。友達と喧嘩別れして、後悔してること話」

「うん」

「多分、それが、私には親友ができないって悟る切っ掛けだったんだと思う」

「親友？」

「そうね、圭輔くんは俊哉くんや薫ちゃんと喧嘩する？」

「たまにね」

「そうだよね、親友っていうのは、時折喧嘩もするよ。心の内を曝け出すんだもん。でも、だからこそ、仲直りができる。けどね、私には、あまりにも時間がなかった。転校した先で、全力でその場所に馴染もうとしても、数週間は時間がかかる。それで、友達って言える期間は残された数日だけだったりしてね。喧嘩なんかしちゃつた日には、友人としてお別れなんてで

きない。そんなことを、私にとって初めての友達との別れを通して知ったの」

ふうと、梨沙は息を吐いた。彼女にとって、この話は酷く疲れる話だったようだ。

「知ったといつても、まあ圭輔くんの歳くらいまでは友達を作ろうと必死だったよ。転校しても、お手紙くれる子もいたっけ、結局一通だけで、手紙のやりとりが続いたことはないけどさ。まあ、そんなこんなで、私は転校した先に溶け込むことを止めちゃった。静かに、影のように過ごしたよ」

友達を作ることを止めた。

圭輔は彼女の言葉が不思議で不思議でたまらなかった。圭輔の理解の範疇を超えた話だった。

でも、とても悲しくて辛いということとは痛いほど伝わってきた。

「友達のお姉ちゃんが、梨沙さんのこと人気だと言ってたよ」

彼女の諦めに満ちた言葉を否定したくて、圭輔はそんなことを言った。でも、梨沙の表情は渋いままだった。

「あー、それはどうなんだろう。女の子が言ってたんだよね。」

それは嫌みかもしれないね」

「嫌み？」

「そ、面倒くさい時期なのよ、今は。友達もろくにできやしない」

そう言って、梨沙は自嘲めいた笑いを零した。

「しかし、こんな話をしたのは圭輔くんが初めてだなあ」

「そうなの？」

「こんなつまらない話、他人に話したりしないよ。特別」

「特別……」

胸が高鳴るような言葉だった。特別、梨沙さんにとって、自分は特別な存在になっていったんだと思うと、嬉しかった。

悲しいけれど、でも、ちよつぴり笑みが溢れる圭輔とは対照的に、梨沙の表情は、笑顔が消えていた。

「どうしたの？」

「ちよつとだけね、圭輔くんがこの話をしたこと、後悔してるかも」

「……え？」

「私って、嫌な奴だなあって、思っちゃった」

いつもより、一時間も早い目覚めだった。不思議と、目覚めはすっきりとしていた。胸の内でも蝕んでいた黒血を止める栓が抜けたのだ、それもそのはずだろう。

しかし、あふれ出した血液は、壁によって堰き止められてしまった。血が流れている分、痛みは今の方が大きいのかもしれない。

梨沙はあの後、「ごめんなさい」と、圭輔に謝った。何も謝

られるようなことはない、圭輔はその言葉を遮るも、彼女は何度も謝罪の言葉を口にした。

どうして、と、圭輔が訊ねると、梨沙は押し黙った。

その日は、梨沙がどうして謝るんだろうと、ずっと考えていたけれど、寝て起きて、冷静になった頭で考えると、あれは梨沙の拒絶だったのかもしれないと思えた。

兄に言った「ごめんなさい」と、圭輔に言った「ごめんなさい」は一体、何が違うのだろう。

布団にくるまって、そんなことを考えた。昨日で流れきってしまったのか、涙は一滴も流れてこなかった。

数分、もしかすると、数十分。自傷行為のような思考を続けると、扉の向こう、浩輔の部屋から音が聞こえた。

もそりと布団から這い出る。普段は適当なのに、今日は丁寧にたたんで押し入れに仕舞い込むと、そのまま部屋を出て、洗面所に向かった。

顔を洗って、台所をのぞきに行くと、母親が朝ご飯の準備をしていた。母は入り口に人の気配を感じたのか、振り向いて、少し驚いた。

「おはよう。今日は大分早いね」

「うん」

圭輔ははっきりとした声で返事した。

それから部屋に戻って、着替えをして、ぼうつと漫画雑誌を

読んで、母親に呼ばれて朝ご飯を食べた。

それから、それから。遊びに誘いに来た俊哉や薫と一緒に、クラスメイトの家に行った。

圭輔は、普通の一日を過ごした。頭の片隅に、彼女の言葉を浮かべながら。

結局、その後は何もなくて、ただ、時間が過ぎていった。

圭輔は彼女への想いを自覚する前の生活を繰り返した。夜、梨沙としていた会話は再開した。美沙たちとも、積極的に遊んだ。でも、何が違った。

そうして、そうして、そうして。短い、泡沫うたかたのような一ヶ月は儚くはかな終わりを迎えようとしていた。

旅の一座が出立する朝。その日はとかくもう、朝から慌ただしかった。七時、圭輔が朝食を摂っている時から旅の一座は立つ準備をしているようだった。窓から、一座の男たちが荷物積み込みでいるのが見えた。

父親が言うには、彼らは今度、北の方に行くらしい。それを聞いて、圭輔はまだまだ暑い時期で良かったと思った。

朝食の後、しばらくして父に呼ばれた。一座の見送りにこのことだった。もちろん、圭輔は見送りをするつもりだったので、大慌てで部屋を出た。

外は相変わらずのうだるような暑さだった。何もしていなく

でも、汗がシャツににじむ。先ほどまで積み込み作業をしていた人たちはもつと暑かっただろう。座長をはじめ、多くの人が額に大粒の汗を流していた。

見送りには俊哉や薫も来ていた。三人とも、特に言葉を交わすこともなく、子どもたちの方に向かった。

子どもたちが立っていたところには、もちろん、梨沙もいた。「お別れだね」

寂しげに、薫が上擦った声で言う。瞳は僅かに濡れ、今にも泣き出してしまいそうだった。

「お姉ちゃんたちと別れたくない！」

一人の女の子が、薫の足に掴まって駄々をこねる。女の子はぼろぼろと大粒の涙を流している。

女の子の、悲鳴にも近い声で吐き出された言葉で、周りに子どもたちも堰を切ったように、泣き出した。

薫もついに、泣き出した。

大人たちが遠巻きで何事か見つめてくる。けれど、自分たちのことで手一杯なせいとか、近寄ってくる人は誰もいない。

梨沙は、黙って子どもたちの様子を眺めていた。

彼女はきつと、色んなことを考えているのだろう。

圭輔のもとにも、男の子が泣きながら近づいてきた。圭輔はその子の背中を撫でてやり、そつと慰めた。

しばらくして、子どもたちは落ち着きを取り戻していた。

「ばいばい、しようね」

梨沙が、子どもたちにそう言った。少しだけ、沈黙が流れた。しかし、

「ばいばい」

美沙が先陣を切って言った。三人とは一番親しかった美沙だったが、薫に抱きついたりすることもなく、真つ直ぐしつかりと立って、気丈にそう言った。

「ばいばい」

また、誰かが言った。それからは、みな口々に別れを口にした。

そうして、別れの挨拶が済むと、子どもたちは梨沙に連れられて、車に乗り込んでいった。

「圭輔」

俊哉がそつと耳打ちをするも、圭輔は静かに首を横に振った。

そつと、道を空けると、遠くからずつと様子を窺っていた浩輔が近づいてきた。

浩輔に気がついた俊哉と薫は、圭輔と同じように道を空けた。

「君の言った通り、一月は本当に短いな」

浩輔は梨沙に向かってそんなことを言った。梨沙は頷いて「本当にね」と返した。

なんとなく気まずくて、圭輔たちは彼らの会話が聞こえぬように距離を取った。

彼らの会話はすぐに終わった。一言二言交わしただけのようだった。

戻ってきた浩輔が顔を真っ赤にしているのは、夏の暑さのせい、それとも「絶対に忘れない」という言葉のせいか。

浩輔は最後に、頭を下げて、走り去って行った。

「絶対に忘れない、か」

梨沙がぼつりと呟いた。貼り付けていた華やかな笑みが少し崩れたような気がした。

圭輔は悲しくなった。別れの悲しさと言うよりも、彼女がその言葉を憐れいものように呟いたことを。

三人は梨沙の前に立った。

「梨沙さん。色んなお話を聞かせてくれてありがとうございます。梨沙さんのお話はどれも面白くて、わくわくしました。

どうか、これからも楽しく、お元気で」

薫が、梨沙への別れの言葉を口にした。

「俺、大衆演劇つてものが全然分かんなかったけど、初めて観たら結構面白くなって思いました。大人になったら、一座の公演を観に行こうかなって思ってます。梨沙さんも、俺が観に行く頃には舞台に立ってるのかな？ とにかく、俺、絶対に観に行くんで！」

俊哉が、梨沙への別れの言葉を口にした。

梨沙は優しく微笑んで、二人に「ありがとう」と言った。

薫と俊哉が、圭輔を見つめる。圭輔は押し黙ったまま、俯いている。

違う、そうじゃないんだ。

圭輔は心の内でそう叫んでいた。

沈黙。長い長い沈黙。

痺れを切らした薫がどんと背中を押した。バランスを崩した圭輔はつんのめるようにして、梨沙の前に出た。

「久しぶりだなあ。こんなに名残惜しいと思うお別れは」

ぼつりと、梨沙は呟いた。

梨沙が張った、圭輔の熱い血潮を堰き止める冷たい鉄の壁は、結局取り除かれることはなかった。

「年下だからって、油断したかも」

本当は、圭輔も「絶対に忘れない」と言いたかった。しかし、言うのをぐっと堪えた。

「結局みんな、泣かせちゃった……」

喉元までせり上がった血を無理矢理飲み下して、圭輔は精一杯の笑顔を作った。

「さようなら」

でも、どうしてか、彼女に対して一矢報いた気持ちになった。だから、

「またね」

それが、唯一、圭輔が梨沙に向けた別れの言葉だった。

バスがけたたましいエンジン音をあげながら、走り出した。動き出した四つの車輪は、信号のない旅館前の道で止まることはないだろう。

北へ、北へ。旅の一座を乗せたバスは姿を小さくさせていった。そうして、地平線の向こうに消えた。

俊哉や薫が、「暑いから家に入ろう」と言った。しかし、圭輔は首を振って断り、あの初めて長話をしたベンチに腰掛けた。ぐっと握りしめた拳に零れ落ちた涙は、流れ出すことができなかった情動のなれの果てであろうか。

圭輔は初であった。想いを告げたいと思っても、結局、梨沙に嫌われたくないと思ってしまった。

圭輔は割り切ることができなかった。ゆえに、口にすることを諦めた。

梨沙は、旅人であるが故に苦悩するが、圭輔は梨沙が旅人であるが故に苦悩する。

しかし、圭輔は恋の甘さと、この世のままならなさを知った。きつと、この甘さは忘れることがないだろう。いや、忘れることができないだろう。そして、この苦みもまた忘れられないものになるだろう。

かすかに残る、彼女の残り香に、圭輔は慎ましやかな祈りを捧げた。

いつかまた、彼女と会えますようにと。

そして、その頃には、彼女が幸せになっていきますようにと。

薫がそっと近づいていて、圭輔の隣に座った。

「また、会えるよ」

薫はそっと、圭輔の手を握った。

「きつと、会えるから——」

結局、私と彼女は二度と再会することはなかった。

◇ ◇ ◇

「先生にもそんな可愛らしい初恋があったんですね」

「やめてくれよ。小っ恥ずかしい、幼い頃の話だ。気の迷いで話してしまっただけ、すぐに忘れてくれ」

「それはどうでしょうね」

そう言って、彼女がくすくすと笑うものだから、私は思わず眉を顰めた。

「しかしあれだな。初恋は叶わないと言うが、その通りかもしれないな」

「それはどうでしょうかね」

「なんだ、初恋は報われた口か？」

「いいえ。今現在、初恋中ですから」

「珍しいな。高校生で初恋とは」

「そんなの、人に依りけりじゃないですか？」

「確かにそうかもしれないな」

「そうでしょう？」

「まあ、なんだ、叶うと良いな。俺の分まで頑張ってくれ」

「余計なプレッシャーかけないでくださいよ」

彼女はわざとらしく、怒ったような口ぶりで言う。

「でも、先生の初恋の話が聞けて良かったです。ずっと気になっていた疑問が解消されました」

「え？」

「既視感、つてやつですよ」

「ああ。そういえば、お前は初めて会った時にそんなことを言っていたなあ。それで、何だったんだ？」

「トウラ、ルラ、ルラル、トウラ、ルラリ、トウラ、ルラ、ルラル。これ、ですよ」

「え？」

彼女は例の子守歌を口ずさみながら、おもむろに立ち上がった。黒板に向かって何か書き始めた。白のチョークで彼女が書いたのは、英語の文。

『hush now, don't you cry』

「しいーっ、泣かないでっつね」

胸がどきりとなった。手に力がこもる。

「これは？」

「先生が時々鼻歌で歌っていた歌の続きです」

彼女は息を吸う。そして、歌い出した。

子どものための歌、子どもに聴かせるための歌だ。

教師になった今なら、その歌を追うことができた。

「どうして？」

「姉にこの歌をよく歌ってもらっていたので」

私は思わず息を飲んだ。

バクバクと音を鳴らす心臓をなんとか抑え、私は訊ねた。

「お姉さんは今、どこに？」

「同じ県にいますよ。先生と一緒に。教員をやってます」

「そう、か。そうか……本当に良かった」

脱力して、深く椅子にもたれ掛かった。正直に言って、泣きそうだった。

そんな私を見て、彼女は眦を下げてくすりと笑った。

「この間、姉さん旅行に行ったんですよ。海の見える老舗の旅館に、義兄さんと」

「……そっか。楽しかったって？」

「ええ、幸せな時間だったですよ」

「それは、良かった」

開け放たれていた窓から風が入り込んできた。前髪がその風に揺らされる。少しだけ身体に帯びていた熱が冷えた。

「悲しいですか？」

いつの間にか隣に座っていた彼女が訊ねる。

「いや、すっきりした気持ちかな」

「諦めがついたんですか？」

「ずっと前から諦めていたさ。初恋はどうせ叶わないって。でも、これで色々と前に進めるかもしれないな」

「私は諦めませんけどね」

「ああ、そういえば今初恋してるんだったな」

「ええ」

「頑張れよ。なんとなくだけど、女の子の初恋は案外叶うような気がするんだ」

「なんか、とってつけたような応援ですね。でも、そうなるってわからないと困ります」

「叶うさ、きっと。その想いが途切れなければ」

遠い記憶の中。優しく微笑みかけてきた黒いシルエット。

「ええ、巡り廻って戻ってきた初恋ですから、そう易々と諦めません。後数年は余裕です」

彼女——美沙は舞台役者のような自信に満ちた表情で、声で、そう言った。

少し、シルエットの背が伸びて、そして、鮮やかな色を取り戻した。

初恋の薫りが、今、新たな一步を踏み出させようとしている。